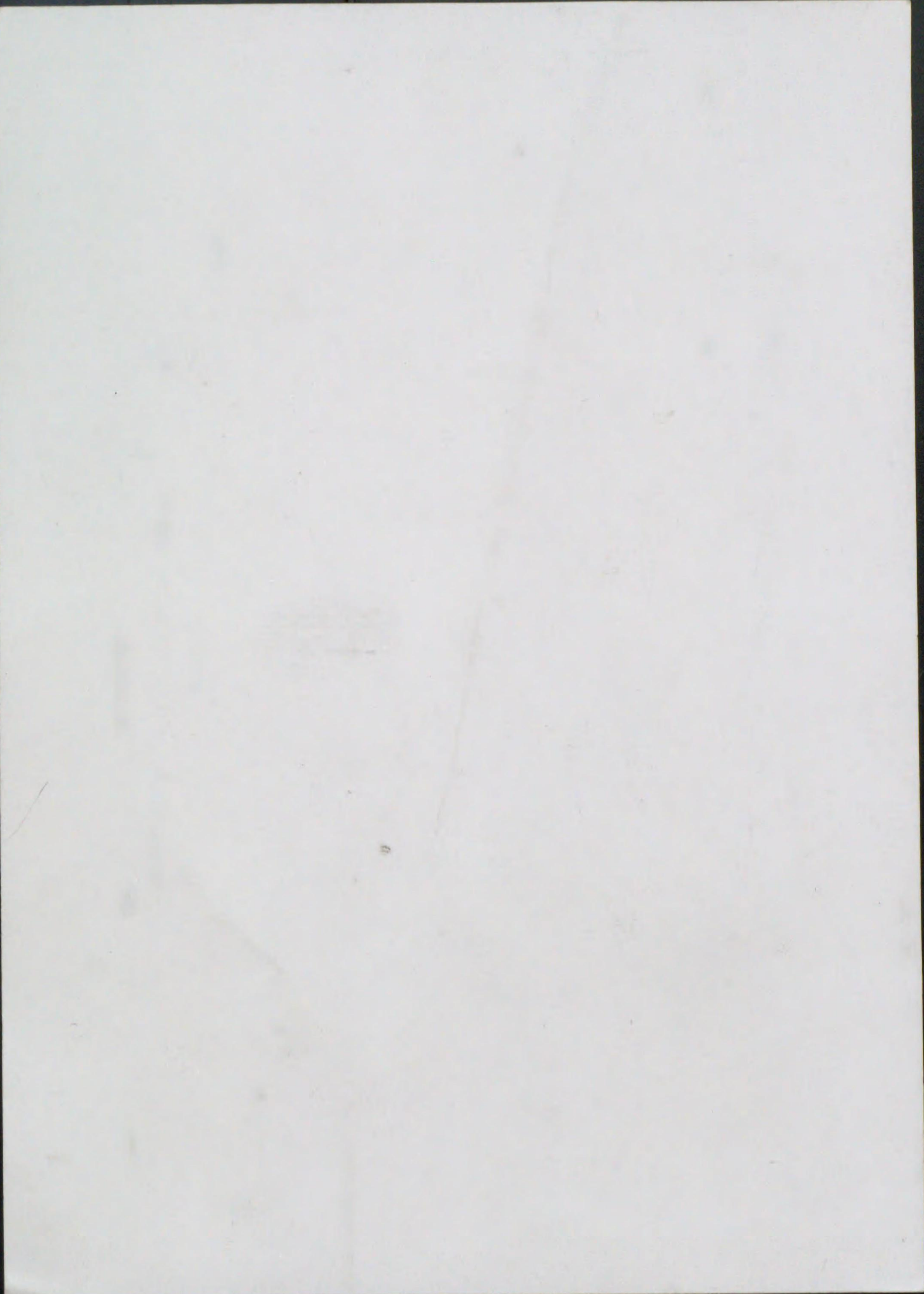


607-361



1200501532990

07
361







石會
日會

井上日石著



日石會

寄贈本

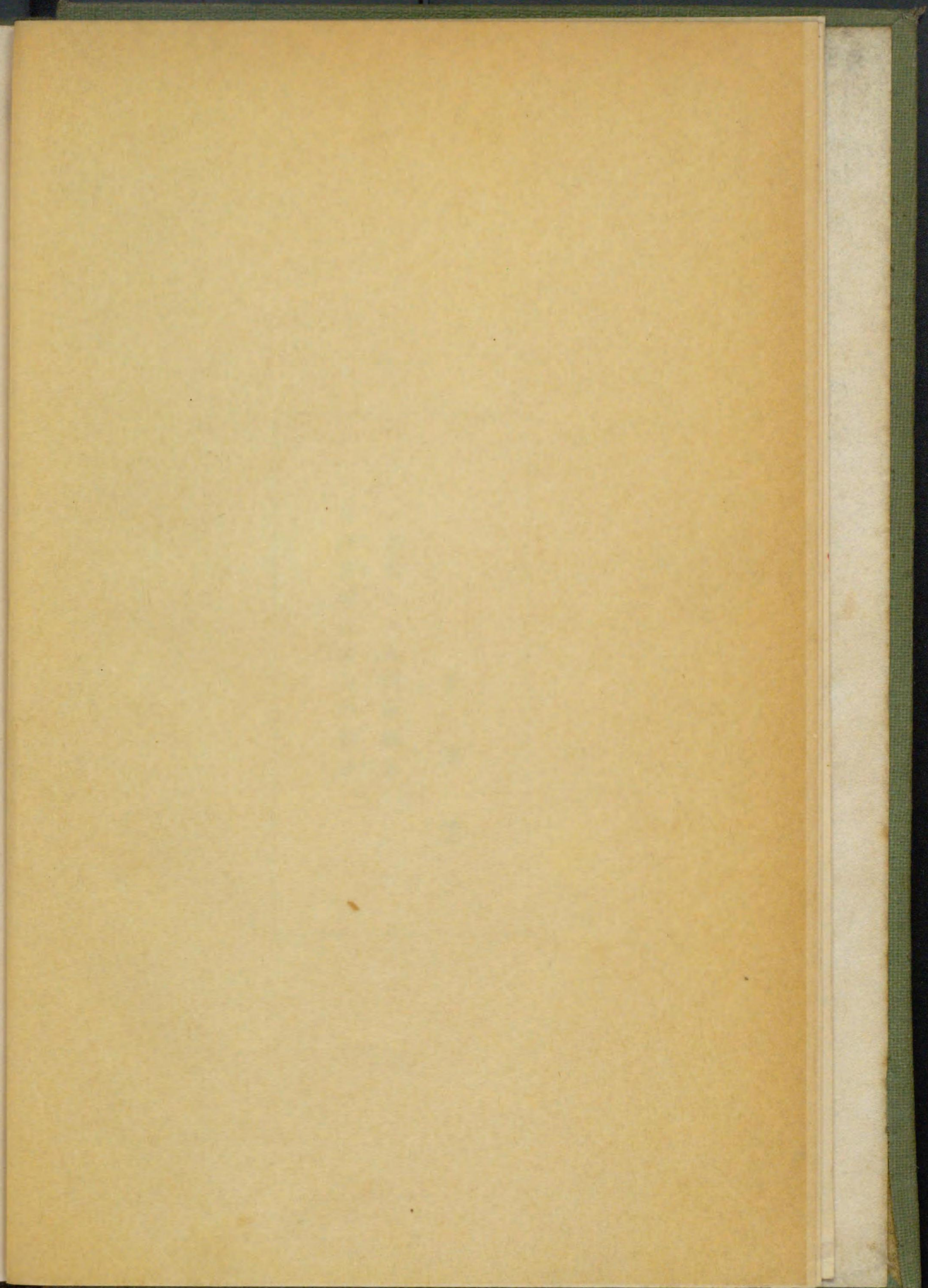
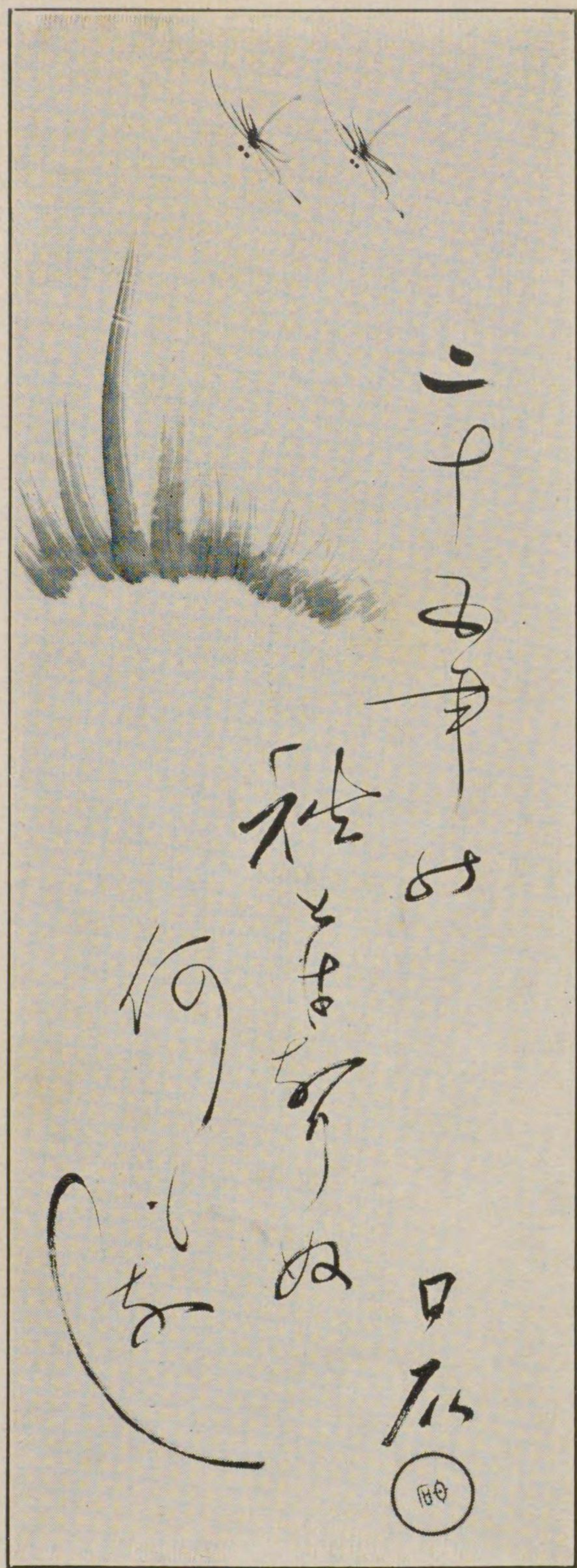
日石兄御夫妻の銀婚を
こまほぎて此書を贈る

日
石
會

日石會



日石會



序として

鶯の それきり啼かず雪の暮 亞浪

若し、あの鶯が二聲三聲啼きついでならば、この句は生れなかつたであらう。

また足らぬ暮しとなりて花咲きし 日石

若し、彼の日暮が満ち足る生活であつたならば、この句は得られなかつたであらう。その賈しい生活を生活するところに流轉の人生に於ける人間日石があり、その賈しさを慙へればやまれぬところに境涯の變に泣く俳句人日石があるのである。

「其安んずる所に安んじて其安んぜざる所に安んぜず」といふ其處まで達觀し得れば、敢て莊周の言に俟つまでもなく、彼は聖人であり君子である。それが出来ればこそ、

花が咲いても暮し變らず南無阿彌陀 日石

更に、かうした悲願の呻きをもらさずにはゐられないのである。「其安んぜざる所に安んじて、其安んずる所に安んぜず」といつても、それは人間の常である。人間なればこそ、臨終の夕べまでの修業を念ずる私らの俳句道があるのである。素よりそれを知らぬ彼ではない、それを知ればこそ、彼の



反省に伴ふ苦惱は一段の深さを加へて來るのである。

深かれ、その苦惱。苦惱がいよいよますます深ければ深いほど、解脱の彼岸は、いよいよますます近づいて來るのである。と同時に、俳句人としての彼の不滅の殿堂は、階一階と築き成されよう。

——日石俳句抄の序文の筆を執らうとして、私はふさ、かうした感懐を久しうしたことである。曾て「石楠」第七卷の十一月號に、君の人となり君の俳句を檢討して、相互の精進に資したことがある。それは左の如きものであつた。

◎

藝術は人格の投影であり、またさうであらねばならない——これは私のこれまで屢次いつた事であるが、道義的觀念の著しく薄らいだ現代、殊にさうした傾向の最もはげしい現俳壇に於て、比較的人格者の群れとして宗教的なまことに心の繋がりを持つてゐる私等のまごゑに、幾んどその典型ともいふべき井上日石君のあることを、私は私等の一つの矜りとして發言することを憚らない。(中略)

我が「石楠」の人々の中、俳句を介して早くから交渉のあつた人々は他になほ存するのであるが、「石楠社」の創立に就いては、最も深い關係者中君は最初の第一人であつたのである。大正二年から三年へかけて私が「やまこ新聞」紙上へ俳句に關する時評やうのものを斷續的に書いてゐた時事であるが、いつであつたか未知の君から、共鳴者の一人として是非逢ひたいといふ意味の手紙が來た、

そして間もない秋九月の一夜當時西信濃町の草堂を訪はれたのであつた。其の時君の考へこして、俳壇の革新を圖るべく一つの句會を起しては何うか、場合によつては自分のうちで開いても宜いよまで勸説してくれた、これが抑も石楠社の俳壇に生れ出づるに至つた契機である。この一事は「石楠」が俳壇の最高權威として存立を保つ限り、俳壇的にも亦逸すべからざる事實である。そして其の第一句會を草堂に開いたのは其の年の十一月のことであり、翌四年の三月に至つて「石楠」が始めて産れたのであつた。

爾來七年の今月今日に至るまで、「石楠」は幾度も幾度も「人」そのものの上に於て、相當苦い經驗を嘗めてゐる。それは必ずしも藝術を本位としての主張や意見の相違から來たものではなく、専ら自己の利害のみ本位とした人々の進退に就いての事であつて、乙字、明成君等の如く純然たる友人關係に立つ人々の離合集散は敢て異さすべきでないが、本來藝術道の上に師弟道なる楔子を打ち込まれてゐる人々すらも、或は物質的事情の爲めに、或は打算的考量的の下に、また或は同友間の個人的反感よりして今は路傍の人となり、甚だしきは惡聲を放つ者すら見受ける中に在つて、日石君の如く始終渝らざる正明の進止は、眞に稱ふべきではあるまいか。私が君を以て人格的に第一人となして憚らない所以は此に存する。

君は多年芝浦製作所に於て模範的なビジネスマンとして知られて居り、その圓滿なる常識と渾厚な

花の香のするごき端居宵の春
氣ぐさりな日の露しげし梅雨の山
（同上）
（七の七）
湛へ水のうつり灯深し夜の梅雨
（同上）

これ等の句に味ふ内的な感味は、君の心の象でなくて何んであらう。その音調の強靱にして官覺の尖銳なる、私は尠くも君が資性の一面を語るものさいひたい。

殊に君の好んで斡旋する言葉のうち最も目立つてゐるものは、日輪讚仰から來た「日曇り」さか「日温み」さかいふ類ひのもので、中には随分無理と思はるる造語がないでもない。これ等は表現上注意すべき一つであらう。その外種々な用語癖が隨處に見出さるるのであるが、今これ等を一括して記して見る。

春の潮退けば。岩ぬめ乾くかな
（一―二）
厩覗けば。鳴く蚊に底の闇ありぬ
（同上）
鼠叱れば。葱のみ光る厨かな
（同上）
芹拔けば。根に吊られ來し田螺かな
（三の四）
月に歩めば。蕨根の石の光りかな
（四の八）

目刺千せば。むかつきの來る日向かな
（六の四）
井戸覗けば。水氣滴る草涼し（房州）
（六の七）

霜名残り見る大。屋根のすがれ草
（一―二）
末枯るる日。大。蛙籠りけり
（三の一）
大。槽の三日。燻りや菜飯たく
（四の一）
雪積んで。大。軒さがる槽。明り
（四の五）
大。裸雪道。つけにお寺まで
（同上）
落花吹いて。鮒寄り場ある大。河かな
（同上）
大。蠅や暴れあさの花を飛びめぐる
（四の七）
秋風や。大。鴉。芒すれすれに
（同上）
虫の聲。大。爐に炊ぐ夜涼かな
（四の八）
大。蜻蛉。黍離れ飛ぶ風の月
（同上）
磧近く。日。焼け蕨のほほけたる
（一―二）

鼻っんぼ治す日。膨れの蒲團かな
日。仕舞ひに人形の煤も拂ひけり
葉がかりの蜂狙ふ蜘蛛や日。あまれし
(四の一)
(同上)
(四の五)

打ち打てば爐に及ぶ藁の埃りかな
馬上行く木の間紅葉り紅葉れり(榛名)
鋤き鋤きて落日寒き藪田かな
子雀のあがき立ちあがき立つ芝の中
竹伐りの竹叩きをる秋の晴れ
雷火走る眞闇雨去り雨來る
(二―二)
(同上)
(六の三)
(六の五)
(六の九)
(七の六)

芽の香漂ふ林の奥の憩ひかな
芽の香浮く林外の雲冷やかに
暑氣まさりゆく林中の日の匂ひ
緑葉の暮れし林間の灯なつかし
(七の五)
(同上)
(七の六)
(同上)

青空に芽のものの息通ふなり
葉のものの根の潤ほひや五月雨
時化名残る風蔓ものの根土浮く
(七の四)
(七の七)
(七の八)

前に擧げた句に見ても、また此に掲げた句に考へても、君の表現ぶりが新傾向の餘波を受けてゐることは疑ひないと共に、君自ら屢次言明してゐるやうに技巧尊重のあとが消さうとして消し難いものがある。私は必ずしもそれを悪いといふものではない。けれども私の理想としては技巧の極致たる無技巧の妙境を望んでゐる。唯だ技巧を主とする人達の注意せねばならないことは、兎角はからひまたくみさがつき纏つて表現の純化を妨げ、直観し得たまゝを失ふ虞れのあることである。そして何すれば斯うすればさいふ風な反省的な表現法は、當然の歸結として、往々あたら感情の理智化さるる嫌ひがある爲め此の點は何人も十分省察の必要があらうと思ふ。

また同じやうな言葉を屢次繰り返すさいふ事も同型化の弊を誘ふ所以であるからして、萬已むを得ない時の外は、成るべく繰り返さないやうにしたい。近來我が「石楠」の人々の間に一種の流行を馴致しやうとしてゐる「牙ゆ」さか「澄む」さか「たのし」さか「淋し」さか「こころよし」さかいふ類ひの手輕に感情のはたらしきを押し形づけた抽象的な言葉を濫用することは最も忌むべきであつて、さうした感情は全一句の底から滲み出し湧き上る事を念させねばならない。私は此の機會にこれを諸

君に警めたい。

私はこれまで君の表現上に於ける各種の彩りに對し、さまざまな批判を加へた。けれどもこれは敢て君獨りにいつた言葉ではないと同時に、斯うした特異の色調が、即ち君の個我の現はれのひそつびとつであるべき事に思ひ及ばざるを得ない。そしてそれ等の表現中すぐれたものに至つては、悠久のかがやきあることを更めて附言する。

君は本來寡作である、殊に内外の事情に制せられて、その句作が斷續的であつたから、「石楠」に發表した句數も比較的少ないのであるが、さりさて君の作風は決して叙上各様の表現にまごまるものではなく、左に記すやうな比較的平淡の滋味、清新の情味を存するものも相當に數へらるる。

犬張リ子毀つ子に窓の藤垂るる

(一―二)

古葉散らして木の芽嵐の收まりぬ

(同上)

挽き口に喰ひ入る蜂や春の霜

(同上)

岩苔を食み居る鳥よ鮎若し

(同上)

遠波の涼しさに海暮るるなり

(同上)

初霜や菜のこぼれ花つつく鳥

(同上)

鉢松の枯葉さしけり風邪心地
(三の三)
貝寄せに見はるかす浪の浮木かな
(三の四)
一面に溝草浮きぬ春の風
(三の五)
がんに欠く音に海鳥みだれけり(洲岬)
(四の五)
本降りさなるまでを蒸す蟬の聲
(四の六)
涼しさの灯を吊つて置く庭木かな
(同上)
森の鯛いたつきの兒にせはし(病兒看護)
(四の七)
うそ寒や灰剝れさばす竈虫
(同上)
蔓手繰つて瓜拾ひ込む月夜かな
(四の八)
樽柿の味出て山に雪の來し
(同上)
山風に秋の氣迫る晝灯し(成田)
(四の九)
秋の雨稻架渡りある雀かな
(同上)
雪やんで炭切る音のさやかなり
(五の一)
遠砧今宵も野風すさまじき
(同上)
目白押す森の明さに未枯れて
(同上)

霧の中水車の湯氣の濛々さ(伊香保)
 灯影追ふ蠅あり風邪の枕邊に (五の九)
 木影ばらさ月の露けさ虫鳴いて (六の三)
 兒等わめく街空雁の一線に(金杉橋) (六の九)
 幟捲くさ見し風やんで月夜かな (同上)
 家ぬちのささやき聞ゆ日向ぼこ (七の一)
 弾き初めに子の重ね着の重からん (七の二)
 吸入のさ中はなれぬ冬の蠅(病中) (同上)
 曇りさもわかぬ浦曲の朝雲雀 (七の五)
 頬にふるる風のぬくみや野の歩み (同上)
 濕氣降りの窓を閉ぢよさ蠶に灯す (七の六)
 罪もなく覺めて蚊のあさ痒がりぬ(愛兒) (七の八)
 鬼になる子の顔いさし夏木立 (同上)
 椎散るや埒にもたるる顔くらし (同上)
 早り路眞向きの風に疲れたり (同上)

今、年次的に君の表現傾向を見てゆくと、概して一様の流れの跡をさめて居り、人は人、我は我、さいふ風に、君は君としての唯一の道を歩いてゐるやうであつたが、俄に昨年末から一轉化の足ざりとなつてゐる。それは君が直観を重んじ、靈覺を尊ぶ一人として、或は當然の歸趨であるかも知れない。私はこれを君の新たな目覺めとして、一段の進展を期待しよう。(大正十年十月)

◎
 今、私はこれを讀み返して、幾んど補訂すべき箇所を見出し得ないほど、君の俳句作の歩みは一貫してゐる。人は人、我は我の獨歩のすがたが儼として存在する。唯だ異なるものは、境涯の變轉であり、その變轉に伴ふ制作の感味が、著しく沈痛さを加へたことである。惻々として人を動かさし、切々として胸に響く、清夜の萩聲を聴くにもひさしい哀調の散見することである。その間すでに十年の歲月を経てゐる、素より俳句人としても、昨日の白石は今日の白石ではない。その内在律に外在律に、表現の技倆の進展はいふまでもなからう。

□大正十一年

空に觸るる思ひに歩む朧かな
 埃りしづめて殘照梅をそそるなり(芝公園)
 萱の髓いらいらさ立つ野燒かな

前書略

獨りいれても寝冷のせじ父は大人なり
初秋の橋上に立てば水蕭す
朝露のすがしきの中に立つ木一本
何事もなき初冬の眼に涙(或る日)
寒風に木影なだるる月夜かな
枝の雪おさすなと子は寝れて居り
炭おこる音手枕の身に通ふ

□大正十二年

地にそはぬ下駄音歩々に凍つるにや
妻の無理子の無理聞かん宵の春
日々の凍て夜の登音に慣れそめし
蝸牛道へ這へ角に日が移る
行水の水の香ほのこ立つ月夜
水際の風はなるるよ蓼の花

團扇いぢりあるほごの涼しさとなりぬ
河水の滌々さ花火降り來り(兩國)
舟底の涼しさに寝よ妻よ子よ(大震第二夜)
枯草の中に立ち居る我もあはれ
朝月や千鳥に寒き耳つたほ

□大正十三年

風邪になやむ妻ものささき三ヶ日
手毬一つに心さられて子の機嫌
凧の下に立つ影の子の脚しげし
親が雛を呼べばなげけば東風荒るる
春淺き水にきらきら日の舞へる
指さきに日のある限り花摘みぬ
重き荷に氣ばかり歩む汗みどろ
虫の音に微光の生るる草間かな
火かければ山の香も吹く枯芒

時雨るるや汐路明りのみだれゆく

□大正十四年

山の上は空いつげいの寒さかな
暖かや船かはす船の女夫もの
行春や汽笛にからむ風の音
夏の夜の燈籠に坐りものいはす
蝗飛びつく眞額の痛さ笑ひけり
子よ泣くな父も泣かずに雁聞かん(或夜)
小春日の鶏は糞して圓く寝る
木の葉舞ふすさびし空のお月様
空のごこか我顔うつる小春かな
師走心の去れば日輪ほかさ浮く
星粒にめぐらるる裸冬木かな

□大正十五年

行きすりの人もなつかし更衣

前書略

行き行きて櫻散りしく野にも寝ん
京を去る日の街々の霞濃し
夜の夏こぼれ灯にそうめんうまし
ひそま立つ月に我が脊の高すぎる
濱曇りわづかな風に鳴く芒
濱芝やごこまですさむ一つ虫
明星の我を見おろす寒さかな
秋風やひもじき心灯を點す
秋刀魚船連るる海上の大落暉
秋風や京へ行く日を兒に問はれ
十夜念佛の聲かすれゆく濱廂
霧に住む人のすがれ茄子もぎつ
暝れば浄土冬夜の風靜か
萱刈りのいつまで晝餉さる日向

戸にひしがれし虫の骸による寒さ
手の疵の胼さなりゆくよ夕落葉

これらは、讀過、眼にふれたものを拾ひあげたに過ぎないのであるが、まざまざ、それこれの事實を裏書きしてゐるではないか。さはいへ、日石はどこまでも日石である。

□大正十一年初頭の四句

静かさの中のざはめき初日の出
元日に居て光明に居るこころ
月を吹く風輕う聞くお元日
元日や吾兒が頬の色豊かなり

□大正十二年初頭の四句

兒も我も健かに初日大晴れな
諸木諸草息吹きしづめて初日影
正月も無事に終りて身尊し
見れば見る吾顔吾子は風邪に臥す

九年も十年も、はたまた十一年も十二年も、その習癖さといふべき表現上の特殊の色調は變るこゝ

ろがない。この一點は、較し來つて微笑を禁ぜざらしむる。

◎

ここに於て、私はひそかに思ふ。この句集は、

「日石君は今年で丁度五十になる、そして廿六の歳に妻帯したさいふこゝであつたから、今年が銀婚に相當する。しかも境涯の變、君はひさり子と共に神戸に、妻君は孤り房州に分れ棲むの餘儀ない運命の逆手に弄せられてゐる。何んさいふ氣の毒さであらうか。知命の賀、銀婚の賀はさて措いて、せめて俳句人として三十五年に垂んたる君が生命の記録たる「日石俳句抄」だけでも世に問ふてやりたいと思ふ。」

かうした事情のもとに生れたものである以上、すくなくも昭和五年度までの制作。——ひたすら俳句にすがつて生きの命をいさしみつあつたこの數年間の血と涙との滴り。——更にまた俳句人として漸く大成の域に入らんさいつつある近來のすぐれた諸作を收むることによりて、この句集の藝術的價値をして一段高からしめたかつたのであるが、事強ふべからず、些かこれを憾みとする。

冀くは、人間日石の上に、俳句人日石の上に祝福あれ。

昭和六年七月七日夜、石楠書屋にて

臼田亞浪

經て來た道

一、明治二十九年頃、村社の夜燈句に應募したのが句作の初めである。當時の選者は郷里の碩學先意堂雲岳、甘文亭鳳鳴の兩宗匠であつたが、處女作と云ふ様なものは記憶に残つて居ない。因に私の郷里は新潟縣北魚沼郡並柳である。三十年より新潟に出て修學。其前後より京都に於ける花の本聽秋宗匠の俳誌「鴨東新誌」に投句をなし、時たま落卷や賞品を貰つて得意となつて居た。三十四年頃から俳誌「ホトトギス」や「卯杖」を見るやうになつて、所謂新しい俳句を知り、近郷の先輩伊倉大瓠氏の率ゆる木茶會に加入し句作を續けた。三十五年家事の都合により一家上京の事となり、十月私の上京に際し記念俳句を募集し、内藤鳴雪翁と花の本聽秋宗匠との選を受けた。かくて上京を一段落として句作も多少中絶の姿となり、一身上に於ても社會への門出の第一歩として忘るゝ事の出来ない年であるから、これ迄の分を取纏めて三十五年以前とした。是れが私の句作上に於ける第一期とも言ふべきものであらう。

一、三十六年頃伊藤銀月氏を會頭させる百字文會員となり、同會の爲活動した。三十七年上京後最初の事業に大なる蹉跌を生じ、老父母を擁して一家の生活にさへ不安を來し懊惱煩悶、極度の神經衰

弱に陥り、自己慰安の一方法として新體詩の創作を始めた。三十八年雜誌「百字文」の後を亨け、文藝雜誌「紫陽花」を發行し、三十九年同誌を松村英一氏等の紫絃會に移した。此年中山鬼骨氏主幹たる日本文學會發行の雜誌「少年文壇」の編輯に携はり、又新體詩の選評をも擔任した。四十年一月養母死去、少年文壇誌上に於て井上折亭、星野夢人、中山鬼骨、喜多村華佛四氏の發起にて追悼俳句の募集があつた。三月金子堅太郎子爵を會長とし、淺野總一郎氏を副會長とせる日本工業協會に入り會誌の編輯に當り、又知友小杉六三郎氏と日本カタロク社を起し、商工雜誌「日本カタロク」を發行し其編輯主任として一切を引受けた。九月結婚。十二月日本工業協會を辭し、株式會社芝浦製作所に奉職。四十一年「少年文壇」の編輯を辭し、又都合により「日本カタロク」を廢刊。同年詩人平木白星氏の文藝時報社成立し、文藝雜誌「文藝時報」の發行に就て、同氏の招きに應じ社員として編輯の一部を擔任した。四十二年白星先生の都合により「文藝時報」の發行を東京經濟讀誌協會に於て引受け、同誌の編輯主任並に新體詩の選評を應諾したるも三號雜誌にして同誌廢刊。四十三年頃、ニコ／＼俱樂部發行の雜誌「ニコ／＼」の新體詩並に新體詩の選者となり、半歳餘にして同誌文藝欄廢止と共に中止。要するに此約八年間は私の最も文學かぶれのして居た時代で、諸雜誌の編輯と相俟つて、論文だ新體詩だ和歌だ俳句だ川柳だ隨筆だ批評だ、手當り次第に下手ながらも書きなぐつて居たのであるから、俳句には多少不忠實なあたりではあつたが、それでも時

事にふれては俳句の力をかりて、自分の足跡を印する事を忘れなかつた。四十五年頃よりは、芝浦製作所員中の文藝同好者を蒐め、島村虹霓氏と共に南呂會を起し、和歌は北原白秋氏、俳句は巖谷小波氏に選を乞ひ、結果を印刷して會員に配付する事となつた。これが即ち石楠の發行さるゝと共に一方の勢力として重きをなした千鳥吟社の前身である。平木白星先生の逝去後新體詩の創作を中絶して居つた私は俳句に復活するの機運に向つて居たが、此年より漸く熟しつゝあつたのこ、一身上に於ても上京滿十年を記念すべき歳でもあり、明治が大正と改められたのであるから、これ迄を一纏めとして四十五年以前とした。これが第二期。

一、俳句に復活するの機運が熟したと共に、私は従來の自分の俳句があきたらなくなつて來た。そこで自分の進むべき句境涯をさがし求めた、が併しあれもこれも、凡てが自分の意を充たしては呉れなかつた。

大正三年養父死去。一蛙と號して俳句を好み時々句作をなせり生前手記せるもの、うち左の數句を抄出する。

夕空の曇りかゝへて鳴く蛙	一	蛙
波際の石にもなれて眠る蝶	同	
あざやかな夜の明けぶりや白蓮花	同	

戦がれて馬もわき向く芒かな
同
稻妻や足にからまる草いきれ
同
色もなきものに移るや今朝の秋
同
三日月も宿れば丸し蓮の露
同
仰山な寒さ話しや紙子賣
同

かくてある時、私はふと「やまき新聞」を手にし、見ることはなしに俳壇を一瞥し、はからずも首肯し得る俳句を発見する事が出来た。そして直に其選者たる白田亞浪氏の門を叩いた。これが大正三年の秋である。これより同氏に依つて句作を始めると共に海紅社や新緑社の句會に出席し、盛んに新傾向の末流を汲んで居たが、やがて石楠社成立。四年「石楠」の創刊と共に同人となり、年を積みする事十有四年、一意俳壇の爲め、日本民族の爲め、石楠社の發展と亞浪先生の健康を念じて來た。私が亞浪先生を訪問し、又「石楠」の同人となり、兎も角も私の俳句は新らし味を加へる事が出来た。そして大正八年迄は新傾向の餘響を受けて、表現形式がほど似通つて居るの事、九年に刊行した句集「螢鳥賊」が此年迄の千鳥吟社の句稿を編輯したのもあり、一身上に於ても二三の會社創立に加擔し、財界のガラを喰つて、經濟的に非常な打撃を受けるに至つた原因をなした年でもあるから、これ迄を一括して大正八年以前とした。これが第三期。

一、大正九年財界の變動に依つて、私の關係せる中央電氣工業株式會社、日住セリサイト合資會社、日本セリサイト磁器株式會社等營業中のもの、創立中のもの、共に相當な痛手を蒙り、營業中のものは辛うじて繼續し得たるも、創立中のものは中止の外なきに至り、私も亦經濟的には殆んど起つ能はざるの悲境に陥りたるも、尙ほ芝浦製作所に勤務中の事さて、一家の生活には不安を感ずることなく、其後十一年迄は常に變動多き私としては寧ろ落着いて居た時代であつた。俳句の方面としては、十一年に俳誌「千鳥」を公開創刊し、號を追ふ事六にして早くも故障頻發。遂に意を決して同信和田御雲氏に乞ひ同氏の手に委れる事となり、表題も「水郷」を改められ、大阪より發行する事となつた。此間僅かに八ヶ月、然も私の俳句生活上に忘るゝ事の出来ないとして、私が俳壇に立つべき最も有意義なる期間であつたから、これ迄を記念すべく劃して以て第四期とする。

一、大正十二年は私の俳壇に於ける漸く多事、選者及び顧問として關係せる俳誌約十種に及び、毎月七、八回の句會に選者として臨席。此年二月芝三田豊岡町より南品川宿に轉居、十八疊二ヶ月間の座敷を開放し、千鳥吟社句會を復活、出席會員毎月七十名前後を算せり。九月大地震と共に一般の句會殆んど沈衰と共に一時閉鎖。十三年千鳥商會を起す。十四年石楠十周年並に亞浪先生御夫妻銀婚祝賀會開催につき、委員長として奔走。十五年は私に最も悲痛なる變動を與へた年である。即ち九年のガラに依つて蒙りたる財政的瘡痕を癒やさん爲、全力を擧げてと言ふより、寧ろ無理算段をし

て迄千鳥商會の發展に資して來た。併し不運として啣つべきか、力及ばざりしとしてあきらむべきか何れにしても、収益の大部分として推定せる、實用新案の電燈用燭臺の賣れ行き不可能の爲、商會不相應なる借財を残して、營業方針を一變するの止を得ざるに至り、遂に二十年勤続の芝浦製作所を辭し、其退職手當に依つて危険なる債務を整理し、専心千鳥商會の業務に従事したるも到底挽回の策なく、決然商會を閉鎖した。此間或は死を決し、或は出奔を企てたるも、一度思ひを妻子の上に致せば、決意も自ら鈍り、兎も角も房州の知人及び近親に依頼して、妻子を安全地帯に送り、五人の店員三人の女中を解雇し、匆忙の裡に私は空拳京を去りて、轉々住所を定めず煩悶、悔恨、慚愧の日を續けて來た最も悲痛にして、悲慘なる私の社會的最後を見た歳であるから、これ迄を第五期とする。そして是を一段落とし、此年迄約三十年間數萬の作句中の思ひ出深きもの、六百二十餘句を選拔し本句抄に載する事とした。

一、私の俳句作に就てども、又小さく共俳壇に於ける事でも、詩壇に於ける事でも、或はすこし大袈裟ではあるが、實業界の進退から、一身上の出來事は以上に盡きた譯ではない。随分變化の多かつた私にまつては、委しく書けば本句抄の全巻を蔽うても尙ほ足りないかも知れない、が凡ては臚げながら此句抄に收めてある一句一句が物語つて呉れる事であらう、いや尠く共私としては追想するに充分であるから茲にはなるべく感情をすて、大體事件の記述に止めて置いた。此句抄を編する

にあつて、佳吟さか秀句さか言ふ様な所謂一般的良作本意に重きを置かず、凡て自己を中心とし假令それが多くの人々の批難を受けた句であつても、自分として忘るゝ事の出來ない句であり、又自分の印して來た足跡を顧るに充分であると思ふものは必ず採る事にした。そして自分を一番良く知れるものは自分である、さ云ふ信念から自選さ云ふ他人から見れば僭越なる行動をまつたのである。古い作句の中には今の私としては、表現にも、修辭にも、あきたらないものが澤山あるけれども、古いものは古い姿のまま、置くのが自分の經て來た道も明らかとなり、それが又本當でもあると思つたので、一切筆を加へない事にした。幸に識者の了解を得らるれば光榮である。

昭和二年五月編輯を終りて、房州海岸の濤聲を聽きつゝ、

茶閑居 井上日石識



著者近影



著者近影

第

一

期

(約七年間)





梅

若葉

露

明治三十五年以前

春の部

梅咲いて窓にさす日の匂ひかな

夏の部

霧雨は若葉まで来て止りけり

秋の部

白露の上に月澄む今宵かな

第
二
期
(十
年
間)

三月

雲雀

風

明治四十五年以前

新年の部

風紅き雲に點すや夕空に

春の部

天人にもはや申さん揚雲雀

實兄鐵嶺占領戰に於て戰死

嗚呼 三十八年三月十四日



陽炎

櫻

蝸

蟬

蠅

夕顔

病床に呻吟する事二句讀書に遠ざかりければ

大宇宙みな陽炎となりけり
渦櫻雪洞寒き夜なりけり

夏の部

蝸吊りて雨の音聴く夜なりけり
蟬鳴くや水なし川の橋の杭
蠅の羽もいで馬事する子かな
模糊として夕顔の花咲きにけり

紅葉

露

露

虫

秋の部

喜多村華佛氏の長女出産を祝きて

姫ちや姫み手ちや紅葉ちや見給へな

天長節に青山街上にて

天皇の御幸に伏して草の露

伊藤三愛兄を悼みて

舐め給へ此露はそも娑婆の露
戯書珍書灯ミモシに迫る虫の聲

第 三 期 (七 年 間)

柿

木 枯

霜

旅衣柿包む袖もなかりけり

冬 の 部

風や田を三圍に灯の見えるて

曉や星飛ぶ野邊の霜寒し

麗か
新年
書初

大正八年以前

新年の部

巨筆執れば灯に書初のうらゝなり
天地の眞柱まじらと立つ我新たなり

春の部

砥石切り積む山うらゝ日埃りに(上總港)
橋普請うらゝ日を川瀬とうくと

梅

東風

春淺

木瓜

春潮

灯消せば壁ひやと梅薫るなり

梅未だ日向に糸を續つぎ居り

汐さびを岩海苔の香に濱東風す

淺き春の家竝見る丘松澄めり(蘇子居)

春淺き赤土の芽草鳥食めり

納屋毀つ壁埃り木瓜くすみ咲く

春の潮退けば岩ぬめ乾くかな

砂どさと泡沈む春の潮田なる

燕

接木

春夕

野遊

行春

蕨

菊根分

藤

八重の潮路のぬくもれば燕渡り來し

接ぎし桃の畑廣々と水づくかな

白砂さらにある濱春の夕べなる

野の遊び萱あれば流れ鳥も見つ

繩暖簾の春行く日向蠅ありぬ

小石もたげて日焼け蕨のいぢけたる

菊根分凝り落つる日は大屋根に

犬張子毀つ子に窓の藤垂れて

別れ霜

餘寒

草萌

朧

貝寄

雲雀

岩藤の芽白に温泉の香まつはりぬ(追憶)

霜名残見る大屋根のすがれ草

高音鳥つくや餘寒の日和木に

積草萌ゆ石々の馬糞かな

夕汐に岬松さわぐ朧かな

貝寄の風見遙かす浮木かな

揚雲雀見あぐんで落す腫めの廣さ

日比谷公園音楽堂前にて

躑躅

春風

虻

春の宵

山焼

朧

樂がに靜まる大衆や躑躅盛んなる

一面に溝草浮きぬ春の風

春風や針の間に焚く蜆汁

鋤きさ中大虻耳をかすめたり

塀こぼたれて梨花浮くばかり春の宵

山焼の煙のみ眞つ日柏かな

水の深さを棹立てゝ見る朧かな

鳥寄せの笛聞こゆ朧木立かな

春日

春の町

林相の移りゆく瀬音春日かな
蜺摺る音に明けたり春の町
鴻の臺を圍りて五句(八年)

汐干狩

荒れ癖の雨氣にもめげず汐干船(押上)

花

瓦焼く煙追うて花の嵐かな(柴又)

花に背いて魚寄りを待つ網場かな(栗市渡)

花筏

橋高に水靄立って花筏(市川)

花

花に通ふ松の簀茶屋の焚火かな(中山)

小鮎

毛蠶ケどきとなりて小鮎の瀬づきかな(追憶)

蜂

花手入焦心に蜂のめぐり來ぬ

夏の部

歸省累代の墳墓に詣りて(三年)

蟬

蟬鳴くや我泣くや墓に佇みて

蝸牛

蝸牛砧石まで草深かに

蝸牛根芝白々退ひく水に

明易し

明易き鳥來ては實桃落すなり(追憶)

祭 若葉 百合 蛾 繭 青田 麥刈

水門の寄り芥あきた蟬しばしば來
麥刈つて土手の巢蜂に火かけたり(追憶)
宵月に木戸鎖して青田見廻りぬ(同)
積み繭の蒸れだつて蛾のけはひかな(同)
折れば露の澁染む指や蛾の巢立ち(同)
百合咲いて晴れ間干す傘と竝べたり
鳥音籠つて雨となり行く若葉かな
月よさの雲走る見て祭の灯

蚊 蚊帳 蟻 鮎 蚊

上のぼり下くだりの蟻ありて椿明易き
瓦剥げば鳴く蚊に芽草白々と
厩覗けば鳴く蚊に闇の底ありぬ(追憶)
上り上りて水苔に鮎の寄ることよ(同)
水打てば蟻渡り草の分れたり
眠る子に蚊帳吊りて鉢木竝べたり
蚊帳を出て川縁の草踏み居たり
川原木に蟬湧く程に砂焼けて

納涼

青東風

納涼

蝸

蟬

風薫る

涼み果てつ大嶺に月が淋し

青東風や芽吹き遅れの枝おろ下す

涼み來て月影に樹下の草長し

病愛兒をみりつゝ高輪病院にて三句(七年)

森の蝸いたつきの兒にせはし

氷かく音更け行くや夜の蟬

折鶴に風薫る聽て兒の機嫌

秋田方面行四句(八年)

驟雨

芒

清水

秋霞

露

秋の水

驟雨半ば雲覆ふ山の鳥音かな(日住山)

霧脚の這ふ早さ芒戦ぎ立つ(鳴子)

足の底冷え草清水踏み堪へず(飯坂)

秋霞む朝な鳥聲こゝろよし(鹽原)

秋の部

養父のみまかりしを(三年)

はかなみて散る露に袖ぬらしけり

佇めば鳥影うつる秋の水

鯊

菊

洲にそゞろ鯊釣る人に日の疲れ

菊下げて街歩りく日を雨晴るゝ

歸省八句(五年)

そゞろ寒

そゞろ寒き車中一律の眞顔かな(上野乗車)

秋風

闇を叱すればたゞ秋風の山野かな

秋日の出

四山暫く雲騒がしや秋日の出(長野附近)

草紅葉

信濃路は小山續きや草紅葉(同)

霧

霧帯はなるゝ曉け時の山平らかな(同)

稻穂

湯氣罩めて風立ちの稻穂見えすなり(高田附近)

赤蜻蛉

さゞれ石の泡乾く跡や赤とんぼ(直江津附近)

芙蓉

残蜂の芙蓉つゝき居る夕日かな(小千谷)

鴉

鴉鳴くや藪裏は胡麻刈り干して(吉田園)

松並木杉並木鴉の渡り音に(同)

刈田

鄙唄や刈田遠見に夕やけ小やけ

虫

月よさの草嵐虫音張り來しに

月草の揺るゝまゝ虫の加減鳴き

蜻蛉

樽柿

うそ寒

そゞろ寒

やゝ寒

時雨

紅葉

月吹けば黍はなれ飛ぶ大とんぼ

樽柿の香に立つ雨を灯しけり

鱗こほれてうそ寒の市場鎖ざされぬ

虫栗を撰り捨てゝそゞろ寒明り

やゝ寒く草刈りすてゝ日に戻る(所見)

成田不動尊詣で三句(七年)

時雨浴び立つ子に畑中の雞頭花(中山)

お山木の紅葉飽くまで降り通す(成田)

芒

朝寒

霧

蔦紅葉

霜

寒さ

風の芒打ち合ふ山河暮るゝなり(同)

朝寒の水桶に見る浅蜷かな

伊香保温泉行二句(八年)

霧さがる水車の湯氣の濛々と

家族風呂しめやかに窓の蔦紅葉

冬の部

ちび茄子は畑に轉るげて霜白し

並藏の疲れ眼に寒く水澄めり

火鉢
枇杷の花
茶の花
霰
霜
葱
残菊
初霜

明暗の影失せて火鉢火を噴けり
鐘遠き寺領に枇杷の花淋し
茶の花のこぼれつく鳥や夕日澄む
木揺れ静かに霰降る家灯すなり
霜濕り路上に眞葛白枯れし(追憶)
鼠叱れば葱のみ光る厨かな
残菊を刈つて棚藤卷きにけり
初霜の苗山に旭ひの落つきぬ

枯野
寒鴉
爐
千鳥

曠野枯れ切つて水聲近まさる
大沼の油花照る枯野日和かな
藪底の流れ凍りぬ寒鴉
糲摺るや汁炊ぐ爐火の盛んなり(所見追憶)
爐火闌けて木瓜に水さす日中かな
打ち打てば爐に及ぶ藁の埃りかな(所見追憶)

大森海岸附近

島の灯の明滅更に鳴く千鳥

第 四 期 (三 年 間)

榼 炭 末
枯

雪積みて大軒さがる榼火かな(追憶)
雪止んで炭切る音のさやかなり
目白押す森の明るさ末枯れて

大正九年

春の部

種伏せ

柳除けて日當り床に種伏せぬ(所見追憶)

山吹

裸子の山吹むしる眞晝かな

花曇

芍薬の芽になづむ蠅花曇

蜂

蜂うねり行く平原の晝深し

獨活掘れば根土ほろく地蜂鳴く(追憶)

春の蠅

春の夜

鶴 鶴

種 蒔

毛 蠶

朧

田 鋤き

春の蠅吹けば飛び吹けば飛び去らず

下野古峯神社に詣て、四句

春の夜の雑音更けし寢耳かな

鶴鶴に夜は明けてあり河原靄

種子蒔の首垂れて鶴の歩みかな

掃き立ての毛蠶見せて居る媪かな

蔭をはなれて影を踏み行く朧かな

鋤き鋤きて落日寒き藪田かな

田 打

芦の芽

目 刺

雀の子

若 葉

麥の秋

松葉牡丹

夕空を見定めて田打切り上げぬ(所見追憶)

水み面もぬく芦の高芽のいらだたし

目刺干すにむかつきの來る日向かな

雀子のあがき立ちあがき立つ芝の中

夏の部

若葉すかしに見ゆる家留守を泣く子かな

麥秋のひだるさ水面見つめたり

松葉牡丹は日に強き花梅干場

梅干

幟

燕

藤

桔梗

茂り

梅干の赤さまぶしき日向かな

幟捲くと見し風止んで月夜かな

幟はたく影りゆく落暉大いなり

青梅の鈴なりに燕ほちく来(追憶)

芽藤地を拂ふ蟻道長々と

大雨湛へし草窪桔梗すん伸びぬ

鳥の鳴らす木の音籠る茂りかな

茂りともならで焼山曇りかな

山蛭

蛭

涼し

虫

山蛭が降るとよ笠をかぶらんか(追憶)

深田めりこむ足の冷たさ蛭襲ふ(同)

滞房中一句

井戸覗けば水氣滴る草涼し

涼しさの轉るげて来るや遠つ波

秋の部

木影ばらと月の露けさ虫鳴いて(芝公園)

公園の月下に虫音踏みしだく(同)

秋晴

虫音そゝる空の深さや二日月(權田原)

遠つ灯のまたゝきに虫音はずむなり(同)

竹賣の竹叩き居り秋の晴

磯部礦泉より妙義山行六句

赤蜻蛉

一つ家の棟さがる思ひ赤蜻蛉

箒草吊り影をどる赤とんぼ

穂芒の山の明るさ赤とんぼ

蔓引けばあけび寄り來る露の音

露

霧

霧晴の谷展く水音遠近に

冬の部

風邪

灯影追ふ蠅あり風邪かの枕邊に

風邪重く母を呼ぶ兒に鳴く梟

日向ぼこ

家ぬちのさゝやき聞こゆ日向ぼこ

雁

子等わめく街空雁の一線(金杉橋)

大正十年

新年の部

彈き初めに重ね着の兒の重からん

春の部

残り葉のいぶせき樹々や春闌けて

濕氣し除けの窓を閉ちよと蠶いに灯す(追憶)

草萌の野明るう踏み別れたり

彈初

春闌

蠶

草萌

芦の花

木の芽

芽

草の芽

芽

雲雀

波いらち居る芦の花かげ月の影

木の芽仰ぐ我が瞳めに空の深まさる

青空に芽のものゝ息通ふなり

虻すがり居る芽草一本の埃りかな

芽の香踏み來て林中深く憩ひけり

芽の香浮く林外の雲冷やかに

曇りともわかぬ浦曲の朝雲雀

夏の部

花火

時鳥

蚊

寢冷い

夏木立

雷

花火明う浮く遠山のそびらかな

投げ襟に来る風うとし遠花火

音數へつゝ寝につく吾兒や遠花火

月影に浮く汝なが影やほととぎす(友に)

罪もなう覺めて蚊を見て痒がりぬ(愛兒)

ふとさめて寢冷え兒に枕頭のものさぐる

鬼になる子の顔いとし夏木立(芝公園)

雨來り雨去り雷火交はすなり

虫干

黒ばい

夏曉

炎天

髪の香湧く

五月雨

梅雨

雷いつか遠音に若葉籠りかな

虫干の垂れ衣ぬくし子の眠り(向島實家)

黒ばえやさりげなく子等草に坐す

ひんがしの空なつかしき夏曉かな

炎天や堰わけて水音傳へてし

髪の香の湧き籠る電車うとみけり

湯タンクの湯氣逆流す五月雨(芝浦)

氣ぐさりな日の靄しげし梅雨の山

虫 秋の風 潮冷に 露 虫 秋風

夕立 緑葉 新緑 椎の花 涼し 単衣

夕立に葉蔭の瓜を見られたり
緑葉の暮れて林間灯なつかし
新緑の風中空を渡るなり
椎の花降るや地上のさゞめごと(芝公園)
椎散るや埒にもたるゝ顔暗し(同)
残照かそけくはやも月涼し
滯房中一句
糸瓜咲く屋根の低さに単衣干す

秋の部

滯房中三句

虫鳴くや人引き起す草静か
しみくと乾磯つぶやく秋の風
潮冷えや磯草採るに小むつかし
草々や三日月晴れて露重し
虫の音にふれず歩むに月遠し
芝揉めのいちらしう秋風を行く(代々木)

秋雨

銀河

残暑

鴉

風邪

冬の蠅

こぼれ葉も見ぬ静かさや秋の雨

銀河冴え來し草原に立つ凝視かな

逆流に船の影押す残暑かな(墨田川)

鴉音追ふ心に霖雨泌む如し(吉田園)

波音に耳暗うあれば鴉かける(三溪園)

冬の部

曉鴉婢の風邪聲もうつゝなに(病中越年一月作)

吸入のさ中はなれず冬の蠅(同)

寒風

寒さ

落葉

銀杏落葉

冬の海

冬の雨

病中實父の訃に趣く三句(一月)

我が影を追ふ寒風の土手日かな(向島)

誰れや來ん彼や來ん寒さ一しほに(上京の姉妹を待つ)

裸灯のまたたき寒う香を聽く(告別式)

落葉かけり來る碧空の微塵かな

銀杏散るあらしに湖面冷やけく

どつと暮れて冬海ひそかなる月夜

冬雨の落ちて川瀬にはじくなり



冬の日

雪

霽

時雨

霜

雁

冬日あみて君の心に溶け入りぬ(訪御雲氏)

古葉たゞく風暗うなりぬ雪もよひ

あぶる手の赤さ船の子霽るよ(芝浦)

炊ぐ船に川瀬とろく夕時雨(同)

霜葉降らす鳥居て心なごみ行く

眠り子のつぶやきかろし雁の聲

大正十一年

新年の部

初日の出

元日

静かさの中のさはめき初日の出

元日に居て光明に居るこゝろ

月を吹く風軽う聞くお元日

元日や吾兒が頬の色豊かなり

春の部

春日

春の月

二月

二月盡

朧

蛙

家込みぬけて我を射るもの春日かな
 佇めば大樹ゆるがす春の月
 雨一ぱい滿つる二月の空低し
 よべの冷えいまだ漾ふ二月霽
 煙りちぎって行く風ぬくし二月盡
 空に觸るゝ思ひに歩む朧かな
 汝が影によれば親しき朧かな
 更けつまさりつ蛙聲込みあぐる胸の底(胃病)

梅

焼野

花

雲雀

芝焼

埃りしづめて残照梅をそゝるなり(芝公園)
 影の如人去り人來梅散る日(同)
 我去れば焼野に残る一木かな(追憶)
 萱の髓いらくと立つ焼野かな(同)
 おゝかすかに日輪顛ふ花の空
 捨てるよに聲落し居る夕雲雀
 芝焼いて芝の匂ひと暮るゝ日よ

夏の部

葉櫻

葉櫻に立つ影の其子いとしも(芝公園)

若葉

若葉吹けば鳥行く果てに天地なし

歸郷の妻子を上野驛に送れば我一人残り行く

はかわいさうなりさて泣く吾兒に

寢冷

獨りいねても寢冷えせず父は大人おとななり

夏空

夏空や汽笛壓して汽笛去る

コスモス

コスモスの影にさまよふ影の人(日比谷)

青葉

青葉いろへる中の日光いぶかしや

梅雨

梅雨の空かぶさる池の水暗し(三溪園)

睡蓮

光線のなき日ちらつく梅雨の空(同)

新樹

睡蓮の影になれ添ふ水泡みなわかな(同)

新樹

新樹かげさはやかに我が息流るゝ

かろくと夕日落ちゆく新樹かな

歸省の印象十句

長岡驛にて汽車を待つ事二時間佐野良太兄に

葉書など認めて

汗

君を思へば肌冷え込む汗鋭ど

堀の内驛にて姉及び甥の出迎へを受けて

車窓覗けば汗狂ふ姉の顔明かし

甥を同行して栃尾又温泉に向ふ途中芋川の茶

屋に憩ふ

清水

清水つんだす娘の笑み軽う皆黙す

夕暮温泉場着先づ眼に入るものは汗ぬくし

き吾兒が顔

涼し

涼しさの腫色しほ浮き立つ吾兒健に

樹木鬱蒼たる懸崖の下なる温泉に浴して

緑樹

緑樹垂れこむる温泉氣けに人うつらうつら

常に虚弱なる妻疲れま氣候變りの爲に氣分進

まず入浴希なり

汗

臥す妻の眉根ものうく汗浮けり

聽て温泉場を去り今泉なる義兄の家に起臥し

て心置きなし

蟬

庭蟬の音も軽ううつ耳の底

月遅れの孟蘭盆まで和田専明寺なる累代の墳

墓に詣す

涼し

偲ぶれど涙凝る夜ぞ涼迫る

義兄の家を辭するに臨みて感慨深し

蟬

蟬よ虫よ鳴け鳴け胸も開かうぞ

二百五十哩を突破して未明上野驛に着く

涼し

汽車鳴りを鎮めて上野山涼し

初秋

秋の部

初秋の橋上に立てば水薫す

雁來紅

雁來紅に雨注ぐ日がな氣うとし

尾花

尾花折つて身ぐるみ風に吹かれけり(花月園)

秋の蝶

水聲にはなれつ去るや秋の蝶(同)

秋の水

地を放れ去るかに秋の水音かな(同)

秋の日

空一ぱいに落ちつく秋の日に惚る(同)

寝たらぬを眼路まなびに崩ゆる秋日かな(同)

露

月

秋の水

秋の日

秋晴

朝露のすがしさの中に立つ木一本

大露や息吹けば澄む朝の空

露けさをめでゝ露けさを厭ふなり

月をはなるゝ雲の迅さに身じろげり

とく出でゝ月下に心浄むべし

肉の光り日の光り和む水の秋(芝浦)

こだはりもなきあが胸や秋日さんざめく

秋晴の光りあつめて森の沼(井の頭)

鵲

枯草

秋風

秋雨

秋霖雨

秋雨

菊

櫻紅葉

鵲音照り込む池の廣さに呆けたり(同)

枯草の中にまろぶよ日と吾兒と(同)

歩めば歩む足落つかず秋の風(代々木)

秋雨の中に煙りの火こぼるゝ

驕り心に芙蓉見て居り秋霖雨

地に吸はれ行く秋雨のかげ淋し

獨り立てば菊に暮れ色ゆらぐなり

櫻紅葉ぞかそけき息ぞ日つまりぬ(芝公園)

鴟

蜻蛉

冬の部

鴟 衍 山 上 の 風 風 を 生 む (三溪園)
交り蜻蛉をのゝくよ芒叢の照り(同)

鷗

凍て

足袋

寒風

初冬

鷗をはなるゝ大日あやなす鷗かな(芝浦)
兒の凍て耳を撫づる手ざはり軽く
朱子足袋に夕日冷たう埃りけり
霏の日は巢にある如し寒風げる
何事もなき初冬の眼に涙(或日)

冬の夜

冬木

寒風

寒さ

雪空

雪

師走

霜

冬の夜の一心にものみなの靈寄り來
あえかの胸の響き空刺す冬木かな
寒風に木影なだるゝ月夜かな
爲す事をなして快き今宵寒し
雪空や焚けば焚く火の落つかず
枝の雪落すなと兒はいねて居り
夜とともにさゞめき消ゆる師走かな
霜強し大氣動かす日動かす

第
五
期
(四
年
間)

炭

炭
お
こ
る
音
手
枕
の
身
に
通
ふ

初日
初日影
正月盡
風邪
雪

大正十二年

一月

兒も我も健かに初日大晴れぬ
諸木諸草息吹しづめて初日影
正月も無事に終りて身尊し
見れば見る吾が顔吾兒は風邪に臥す
雪降り積む静かさに言葉すくなし

凍て

宵の春

寒空

梅

墓

地にそはぬ下駄音歩々に凍つるにや

日々の凍て夜の躑足に慣れ初めし

妻の無理兒の無理聞かん宵の春

寒ん空の諸聲秘めて煙り這ふ

梅にとられて心うつろなる月夜かな

二月

轉居雜感七句

墓鳴くやほのぼのと窓の曉け淋し

種蒔

春の空

下蒨

木の芽

臙

臙

手まめとなつて種蒔く妻の身なかりし

晝の春へ空へ消え行く庭焚火

ひよこ寄れば吾兒が瞳の冴え下蒨えて

日もはじくばかり木の芽のふくらみよ

我にいざよふ月かや芽木の影靜か

眼になじまぬ庭の臙に立つわびし

四月

草は草木は木に臙刻むなり

落花 朧 落花 春風 八重櫻 薰風

止めば佇ち吹けば落花を歩むなり
水際の朧はなれて朧かな
花散り込む中に水田の水さゆる
春風や行けば野の冷え山の冷え
八重櫻咲くいたつきの星の空
歩み歩めど心けだるし八重櫻

五月

薰風や松の花粉の眼にふるゝ

蛙 藤 蛙 春盡 蜂 裕 葉櫻

田蛙のころゝと肌に風ふるゝ
投げかけしやうに垂れ居り崖の藤
星明かき田を一しんに鳴く蛙
眠りぬきしけだるさを春つくる日か
静かさの樹に立てば蜂の唸りかな
裕着れば暑き日ぞぬげば寒き日ぞ
葉櫻や水泡消えゆく晝の音

六月

明易し
月見草
夏野
梅雨
螢
蝸牛
日傘

とく目覺め居て明易き蚊帳の冷え
我が顔の我に明るし月見草
夏野來て息吹尊とし草の影
日も梅雨の降りみ降らずみ空重し
草の香に通ふ香のあり螢籠
蝸牛這へ這へ角に日が移る
晴れやかな眼まなこに影散る日傘かな

七月

星祭
水馬
夏草
晝寢
行水
汗
夕立

星祭るさ中に星も踊らうぞ
あるは瀬に乗りてやすらふ水馬
日のにほひ継り居る夏草に坐す
晝寢ざめ面はゆき夕日うつゝに
行水の水の香ほのと立つ月夜
汗沈むまで待つ人の遅かりし
夕立のからりと晴れて身ぬちかろし

八月

蓼の花
蓼
草の花
稻妻
茄子
盆の月
涼し
花火

水際の風はなるゝよ蓼の花
川べりを歩めば蓼の風冷ゆる
咲くは光るは露晴すごき草の花
稲妻や水へ落ち込む栗の音(追憶)
風しめり来て頬の冷た茄子月夜
葉かけ花かけ草の香かろし盆の月
團扇いぢり居る程の涼しさとなりぬ
河水の淙々と花火降り來たり(兩國)

汗
涼し
そゞろ寒
秋の風
月
虫

關東大地震に直面して六句
地震のみの夜の汗さまさまのおびえに(一夜)
舟底の涼しさに寢よ妻よ兒よ(二夜)
はりあひのなない道々のそゞろ寒(深川行)
聲なげて見ても應へなし秋の風(同)
晴れ切って寒し月光いと寒し(同)
虫音一つに焼跡を行く獨り(同)

枯草

千鳥

十二月

枯草の中に立ち居る我もあはれ
日影ふりつゝ枯草の中の草動く
朝月や千鳥に寒き耳つたぼ

大正十三年

一月

初日

屠蘇

羽子

三ヶ日

初日かるく昇り切つて我が影澄む
地震さけし樹蔭に初日なつかしむ
荒れ壁のわびしさのまゝ屠蘇汲んだり
羽子打ち上ぐる碧天の光り落つ
風邪になやむ妻もの敏き三ヶ日

手毬

風

寒ん

東風

手毬一つに心奪られて兒の機嫌

風の下に立つ影の子の脚しげし

むくくと豚の背に散る寒ん夕日

二月

東風の木々そのまんま夕日沈んだり

鶏の蹴ちらす砂はも絶えず東風光る

雛よ鶏よ寄れ寄れ東風が馬鹿寒い

雛の聲溶け入る東風の天廣し

三月

親が雛を呼べばなげけば東風荒るゝ
東風に暮れ行く鶏舎の引手の環が鳴る
東風輕うふるゝに我が家ふくるゝか

震災の爲鳥有に歸せし我が芝浦製作所の海岸
に立ちて

春の海

春淺し

鐵屑の匂ひわりなし春の海

春淺き水にきら／＼日の舞へる

寒名残

寒月

桃の花

柳

花摘

青葉

春浅き竹林に日散るは散るは
寒ん名残る風落日に吸はれゆく
影と共に凍て行く我か寒の月

四月

残光の星が寒かる桃の花
水よさに一さ日はなべて柳澄む
指先に日のある限り花摘みぬ
葉の色をそのまゝに青葉しづる雨

五月

館林茂林寺方面行三句

麥田つるゝ中の花菜があちこちに
残り花見まじとすれど見返りぬ(人に寄する)
花の香に寄り添へば散るけはひかな(同)

六月

かび咲いてにほはしの書に心親し
七月

かび

花菜

月見草

虫

涼し

病葉

炎天

汗

鳥よ塹に行け行け月見草静か

虫賣が去んで灯街の月更くる

涼しさや葉なりに動く月の影(春の家)

病葉の落つる木の木のわりなしや

武州長瀨行三句

炎天や聲なき水の照り返す

炎天の焼け岩に足鳴らし居る

重き荷に氣ばかり歩む汗みどろ(所見)

コスモス

蟬

蓮の花

蟬

早

新涼

八月

コスモスに淡き夕日の暮れかねつ

森蟬の湧き返る暑さ背負つて來し

蓮の花ぽんと咲きまたぽんと咲き

蟬の聲落ち込む澤に浸り居し(追憶)

鶴嘴を打ち込む早りかんと響く

九月

新涼の空のどこか破つて見たし

虫

秋の雨

虫

菊

ぢつと居れば虫音刺し通す頭かな

膳見据ゑて食待つ腹に虫音通ず

虫の音の中にとつぷり暮れて居し

秋の雨花盡きし草のそぼてるよ

十月

虫の音に微光の生るゝ草間かな

菊の香渦巻く日和つながるゝ

諸草が枯れ行く中の菊一本

雁

小春日

小春

穂芒

枯芒

刈田

山々をぼかし行く雁の遠音かな

小春日に消え入るこゝろ日も暮れつ

鶏の落毛に小春の風のまつはりつ

穂芒に湧く風音をなつかしむ

晝餉衆に穂芒の影ひそとあり

火かければ山の香も吹く枯芒

刈田遠見に熟柿媚びるよな心

渡り行く鶴鴿に刈田果つるなし

冷
虫
時雨
炭
落葉

あさり行く鳥に刈田の土冷ゆる

足を病みて二句

踏めば冷ゆる大地の固さ足に響く
足の痛みを吸ひ行く虫の音も明けぬ

十一月

すがれ行くものに時雨のなやみかな
炭の香に枕壓さるゝ寢覺かな
我にする落葉かやなつかし戀し

冬
時雨
冬
時雨

落葉からく我に醒め行く夕日かな

十二月

枯れて行く草の音ひそと冬日かな
時雨るゝや汐路明りの亂れゆく
冬の日のかそけき路地を歩む鶏
草の風いつか時雨となりゆけり

大正十四年

一月

元日
羽子
寒さ
寒月
藪入

まばたけばお日もまばたくお元日
初日來い來い吾兒が羽子突く眼の空へ
山の上は空一ぱいの寒さかな
寒月や木兎の二度聲またるよ
藪入の日のいそしみをつゞけたし

冬
寒さ
雑魚干す
寒さ

修善寺方面行四句

憂き事のみ多き今日此頃何さなく寂しき心を
抱きて一人温泉に浸りつゝあれを思ひこれを
思ひ妻を思ひ兒を思ひ潜然として涙下る

浸り温泉の香に泣く冬や修善寺
瀬音親しう聞こゆ寢覺も寒からず
捨て干しの雑魚に日の色なまぐさし(静浦)
炭焚の火幾ところ這ふ寒し(沼津)

二月

雪解 薄雲に日のにじみ居る雪解かな
 海苔 海苔干すや香湧き早やなる洲のぬくみ
 落椿 落椿落つにまかせて人も來ず
 雛 頬ざし眼ざし汝を慕ふよ新雛
 雛 張り合うて兒が買ひし雛を惹くしむ
 朧 焚火跡ぼんやりと見過ぐ野の朧
 朧 芥屋が落す芥の光りや河岸朧(芝浦)

三月

暖か 暖かや船かはす船の女夫もの
 桃花 静けさが桃咲く畑をほかし行く

祝石楠十周年並に亞浪先生銀婚式

三月 祝ぎに祝ぐ我が三月の空固し
 蛙 茜さめし雲のけはしさ鳴く蛙
 春雨 春雨に潮捲いて來る海の色

四月

陽炎 汐干 陽炎 行春 花松 蛙 幟

陽炎の草に消え行く人の影
貝も掘らず押し泥に油花照るばかり(品川)
寄れば消ゆる陽炎ながらなつかし

五月

行春や汽笛にからむ風の音
花松の素立つ月夜の寒かりし
蛙かろゝかろゝ更け行く家淋し
幟かけ雲かげうつゝなる日ざし

汐干 旱 五月雨 夏帽 螢 避暑

泥の香に雨あがり行く干潟かな

六月

旱り虫飛ぶ白塵の中の晝
流れやまぬ河の音かな五月雨るゝ
夏帽にかゝはらぬ雲の峯遠し

七月

水遠音闇動かして湧く螢
雨の日は話聲に籠る避暑の宿

八月

燈籠

虫

紫陽花

汗

九月

砧

蛸

夏の夜の燈籠に坐りもの言はず

蟲ほがらほがら鳴く夜の月ねむし

紫陽花に夜の色こめて人戀し

汗收りて親しみの言葉聞く

障子裂けんばかり砧の音澄めり

蛸の音にひかれ行くまゝの我

稻雀

蝗

田渡りの稻雀見るからに賑はし
蝗こぼるゝ稻田の中の月の照り
蝗飛びつく眞額の痛さ笑ひけり

十月

梟

名月

囀

虫

汝が心とのへだたりを鳴く梟(妻に)

名月を見て居れど名月冷たし

山の小鳥さまよふや囀はろけし

我が恙妻の恙を鳴く虫か

秋風

紅葉

十一月

雁

木の葉

小春

木の葉

靡きよれば草も抱きたし秋の風

歩々にくだくる秋風の土の音

紅葉きらめく中の川水さはがしや

兒よ泣くな父も泣かずに雁聞かん(或夜)

木の葉降る月光に立つ我は人か

小春日の鶏は糞して圓く寝る

木の葉舞ふすすさびし空のお月様

實南天

小春

十二月

亡びゆく庭木明るし實南天

すがり葉のひらめけば寒き小春かな

小春

冬空

冬木

空のどこかに我が顔うつる小春かな

冬空や思ひつむれば日も昏し(内憂外患)

冬木竝んで囁き合へる日南道

師走心の去れば日輪ぼかと浮く

星粒にめぐらるゝ裸冬木かな

大正十五年

一月

初日

初日 透く疊の冷たさを歩りく

元日

元日 や日にめぐらるゝ人黒し

陰 ありく鶏 元日に觸れ居るか

羽子

羽子 突こと兒にせがまれて突き暮れし

二月

梅の花

よく見ねば見えぬ 梅花の空明し

梅

梅の闇 放れゆく空の二日月

殆んど自分の家の如く親しみつゝあつた二十

年勤續の芝浦製作所を辭するの止を得ざるに

至り感慨いと深かりき

暖か

放たれて足落着かず 大地ぬくし

三月

春時雨

獨りうなづく 真空明るし 春時雨

春
春の日

春の底ひのなげきの水の音聞かん
生き行くものゝ恥に春日のまばゆけれ

四月

萬葉つき既に用なき身もひたすらに妻子の上
に思ひを致せば甲斐なき生を生かし行く道と

していよく京を去る事とす四句

衣更
蚊

行きずりの人もなつかし更衣
蚊も未だ假り寝の夢の易かりし(友の家に)

櫻 霞 裸 蚊 夏の風 夏の夜

行き行きて櫻散りしく野にも寝ん
京を去る日の街々の霞濃し

七月

まこと日に裸さらしてみともなや
獨り居れば蚊もなつかしき灯影かな
夜のとばりおろされし夏風に歩りく
夜の夏こぼれ灯にそらめんうまし

八月

銀河

銀河渉る音して虫音かすかなり
濤聲に呪はれつ銀河見つむる

十月

秋の暮

月

芒

朝寒

我が心我をはなれず秋の暮
ひそと立つ月に我が背の高すぎる
濱曇わづかな風に鳴く芒
炊ぎ終へてしよんぼりと立つ朝寒し

十一月

秋の日

虫

秋刀魚

朝寒

短日

寒さ

しみぐと見つむれど秋の日は圓し
いねし兒の寢息かそけし虫の聲
虫音はろく流れ来る廊下踏む音す
濱芝やどこまですさむ一つ虫
秋刀魚船連るゝ海上の大落暉
朝寒や鶏の餌を煮る姿映ゆ
燃えて燃えて燃えつくす日や暮早やし
明星の我を見下す寒さかな

秋風

末枯

秋風

十夜念佛

焚火

秋茄子

秋風やひもじき心灯を點す

末枯の地下深く杭を打ち込みぬ

秋風や都へ渉る鱈船

秋風や京へ行く日を兒に問はれ

十夜念佛の聲かすれゆく濱廂

船大工晝餉とる焚火おとなし

霧に住む人のすがれ茄子もぎつ

十二月

木枯

鴨

冬の夜

萱刈

寒さ

日向

布團

木枯や讀書放てば心耳澄む

大時化の波に岩根の鴨あぶなし

暝あやみれば浄土冬の夜の風静か

浄土ひらけつ眠り行く冬夜かな

萱刈のいつまで晝餉とる日向

叱つて見ても兒の顔見ればたゞ寒し(現況)

玉葱の芽ふき日向の一人なり

布團着て夜の烈風を聞く疲れ

凍て雲
焚火
寒し
霰
水洩
寒さ
落葉

燃え落つる日に凍て雲の解けつらん
船大工日についで焚火大きく
濤吼ゆる中の水花寒けしや
丈^{タカ}くらべ子どもちの背伸び霰降る
白日の下水洩の氣はづかし
思はねど生の疲れを知る寒さ
戸にひしがれし虫の骸による寒さ
手の疵の胼となりゆくよ夕落葉

冬
寒さ

潮音の調べかなしも夜半の冬
人多き中に我一人なる寒し

季
題
索
引

(五十音)

季題索引

【ア】

- 春。 浅き春 四二〇五二〇六 暖か 二七一三五 芦の芽 三三 虻 四五
夏。 青東風 吾 明易し 四四 只 九 汗 八八三九 一〇二一〇八一〇 青田 四九 青葉 八〇一〇六
紫陽花 一三〇 鮎 只 蟻 只
秋。 朝寒 五二一八二一九 秋の暮 二六 天の川 七二六 秋霞 吾 秋の水 五八五六 秋風
五七七八七 一〇二一三三三〇 秋の日 五八六一九 秋日の出 三三 秋晴 六六 秋雨 七
八七一〇 秋霖雨 八七 秋暑し 七 拾 七 芦の花 充 秋茄子 一三〇 秋の蝶 八五 赤
蜻蛉 五五六
冬。 霞 五六一三三

【イ】(井)

新年。いかのぼり 五二〇四

秋。稻妻 一〇〇 稻穂 五五 稻雀 一三三 蝗 一三

冬。凍て 八六 一三三 凍て雲 一三三 銀杏落葉 七

【ウ】

春。麗か 四 梅 三 四 九 六 一 五

夏。梅干 六

秋。うそ寒 五 四 一〇

冬。末枯 五 一 三〇

【エ】(エ)

夏。炎天 七 一〇八

【オ】(ヲ)

春。隴 四 四 五 六 七 六 九 六 二 六 落椿 二 六

秋。尾花 八 金 四 一 三

冬。落葉 七 二 三 一 三 一 三 三

【カ】

新年。書初 四

春。陽炎 五 二 八 貝寄風 四 霞 一 七 蠶 六 蛙 七 九 二 七 二 八 墓 六

夏。風薫る 五 六 雷 七 七 髪の香湧く 七 蛸 五 四 かび 一 七 蝸牛 四 七 六 蚊 四

七 一 六 一 七 蛾 四 九

秋。刈田 五 二 一 二 三 萱刈 一 三 柿 六

冬。寒ん 一 四 寒風 七 八 寒名残 一 〇 六 寒月 一 〇 六 二 四 寒風 九 寒空 六 風邪 七

六 五 枯菊 五 枯野 毛 枯草 七 一 〇 三 枯芒 二 二 鴨 一 三 寒鴉 毛 雁 七 七

二 一 三 鷗 八

【キ】

春。如月七 菊根分置 木の芽充五
夏。行水充

秋。霧五五七 銀河齒一六 砧一〇 菊五七二〇 桔梗齒

【ク】

新年。元日七二四二四

春。草萌四六五 草の芽充

夏。薰風五六 黒ばえ七

秋。草紅葉五 草の花一〇〇

【ケ】

春。毛蠶六

夏。夏曉七

【コ】

春。東風四二四一五 小鮎四 子雀空

夏。衣更一六

秋。コスモス八〇一九

冬。小春二二二三二三 小春日二二 木枯六二三 木の葉二三

【サ】

新年。三ケ日一〇三

春。三月五二七 雑魚干す二五 櫻美四七九一〇七一七

夏。五月雨七八九二九

秋。残暑齒 櫻紅葉八七 秋刀魚一九

冬。寒さ五七五八九二四二五二九二三二三 残菊五

【シ】

新年。新年四 正月盡五

春。霜名殘 四 汐干 四二八二九 芝燒 七九 下萌 四六五
夏。驟雨 五 清水 五八三 茂り 四 新緑 七 椎の花 七 新樹 八一
秋。潮冷え 七 新涼 一〇九
冬。時雨 四六二二二三 霜 六五五 六八 師走 八九一三三 十夜念佛 一三〇

【ス】

春。種子蒔き 三九五 雀の子 三
夏。涼し 五七三八 八二〇二〇二〇八 納涼 五 睡蓮 八
秋。芒 五五六一六 芒の穂 二二
冬。炭 六九〇二二

【セ】

夏。蟬 五四四 四九 五八四一〇九
秋。鶴鴿 三

秋。そろろ寒 五 四一〇一

【ツ】

【タ】

新年。凧 五 一〇四

春。種蒔き 三 五 種伏せ 六 田打 三 田鋤き 三

夏。蓼 一〇〇

秋。樽柿 四 七夕 九 蓼の花 一〇〇

冬。短日 一五 足袋 八 焚火 一〇一三三

【チ】

冬。茶の花 五 千鳥 五 一〇三

【ツ】

春。接木 三 躑躅 三 燕 三 四

夏。梅雨セハ九二九 月見草九二〇八

秋。月六二〇二一六 露三三三 五六七六 蔦紅葉五

【テ】

新年。手毬二〇四

夏。でゝむし四七九

【ト】

新年。屠蘇二〇三

秋。燈籠二〇 蜻蛉五 酉六八

【ナ】

春。菜の花二〇七

夏。夏空ハ 夏の曉セ 夏の夜二七 夏の風二七 夏帽二九 夏木立セ 夏野九

夏草九 茄子一〇〇

秋。南天の實二二三

【ニ】

春。二月戌 二月盡戌

【ネ】

夏。寝冷えセハ〇

冬。葱五

【ノ】

春。野遊び 野焼き 海苔二六

夏。幟 齒二八

【ハ】

新年。初日 九三 一〇三 一四 初日の出セ 初日影 九三 羽子 一〇五 一四 一三四

春。春一六 春浅し 四三 一〇五 一〇六 春寒し 四 春蘭 六 春盡る 九七 春行く 四二 一八

春の夜三 春夕べ四 春の宵望 春の日四七 春の月七 春の空五
 春の町四 春の潮四 春の海一五 春風望六 春雨二七 春時雨一三 春の
 霜四 花摘み一六 花弄四七 九一七 一七 一七 花筏四 花曇六 花散る六 花
 菜一七 花松二八 春の蠅三 蜂四六 七
 夏。 梅雨七 八 九 一 二 三 裸一七 葉櫻八〇 七 蓮の花一〇九 蠅三
 秋。 初秋五 初霜五 花火七二〇 雁來紅五 鯨三
 冬。 初冬八

【ヒ】

新年。 彈初六
 春。 雛二六 雲雀三 四 九 七
 夏。 早一〇九 二九 避暑二九 日傘九 晝寝九 單衣七 墓四 蛭五
 秋。 冷え七三 二二 蛸五〇 一三〇

冬。 日向一三 日向ぼこ七 火鉢五 枇杷の花五

【フ】

春。 藤望四 四 七
 秋。 芙蓉五
 冬。 冬一五 一三 冬の日七 二 三 冬の夜九 一 三 冬の空一三 冬
 海五 冬の雨
 五 布團一三 冬木九 一 三 冬の蠅四 鼻一三

【ホ】

春。 木瓜四
 夏。 時鳥七 螢九 二 九
 秋。 盆の月一〇〇 星祭九 穂芒二二
 冬。 椿五

【マ】

春。 繭児 松の花二八
夏。 祭児 松葉牡丹三

【ミ】

夏。 短夜四四九 緑葉三 水馬九
秋。 實南天一三
冬。 短日一元 雲共 水漬二三

【ム】

夏。 麥の秋三 虫干七 麥刈児
秋。 虫三 垂三 六七 一〇一 一〇八 一〇九 一一〇 一一三 一二九

【メ】

春。 目刺三 芽木充三 芽草充
秋。 名月二三

【モ】

春。 桃の花一〇六 一一七
秋。 紅葉三 酉三 七 一三 三 鴟三 四 七 八

【ヤ】

新年。 藪入二四
春。 彌生三 二七 燒野七 山燒四 山吹六 八重櫻六 柳一〇六
夏。 山蛭三
秋。 やゝ寒三 酉一〇一

【ユ】

春。 行春四 二八 雪解二六 百合四九
夏。 夕立五 七 三九 夕顔三
冬。 雪共八九 三 雪空八九



を道の活自
るあつつり迪

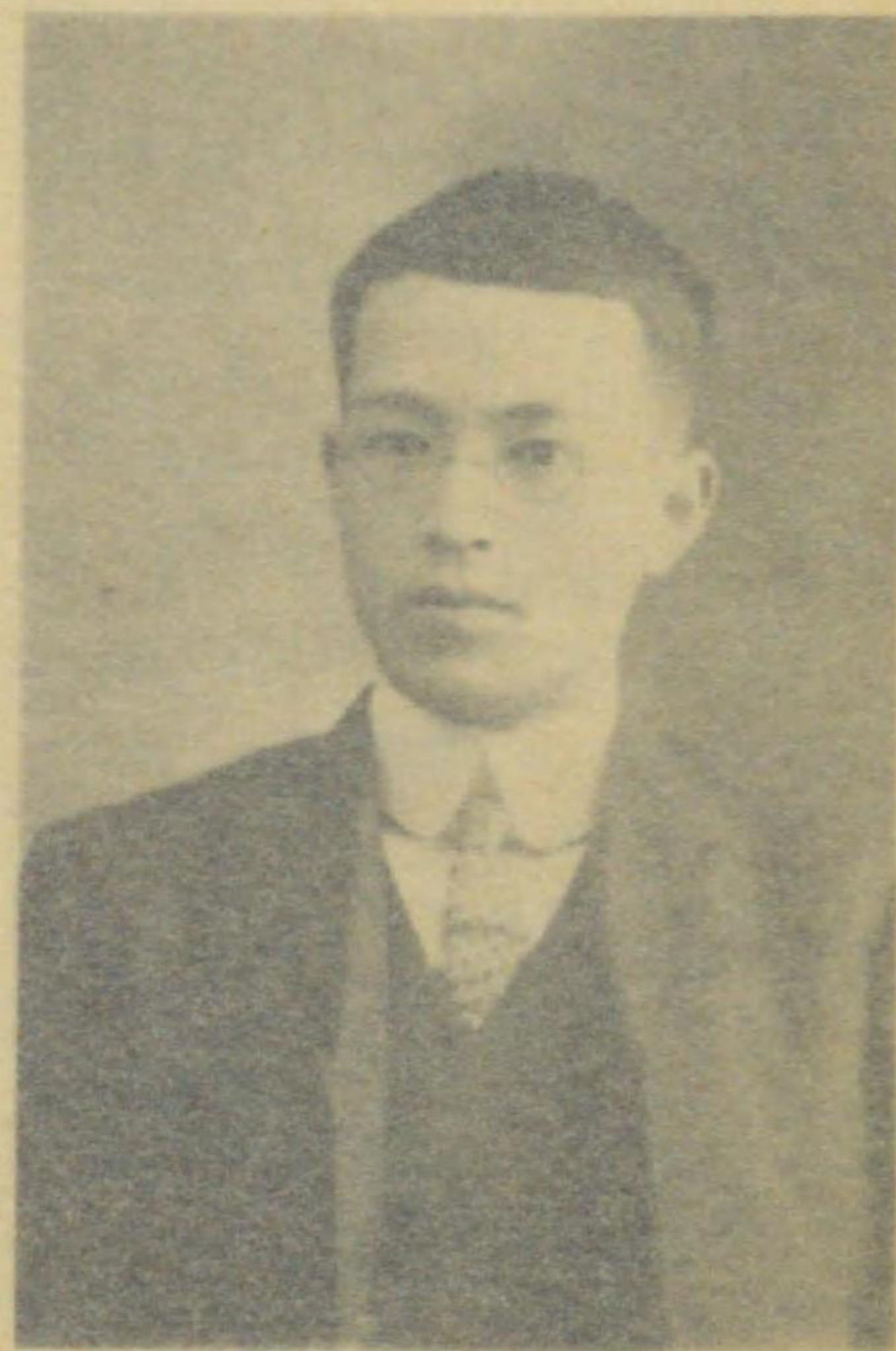


影近代千妻

代時濁新

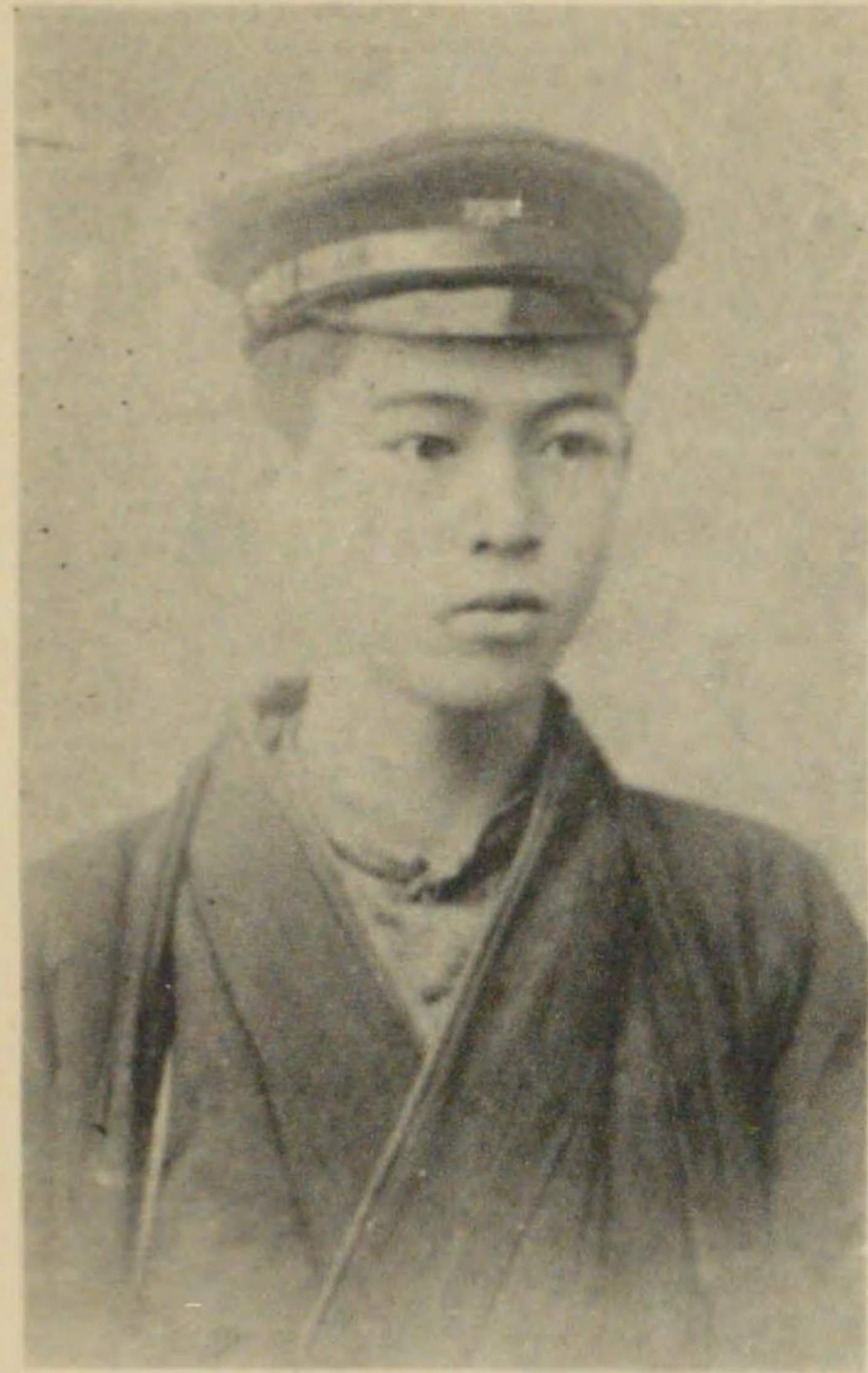


の中學通
影近子愛女長



歳の婚結

春。餘寒四 宵の春齒 【ヨ】
 春。落花六 【ラ】
 夏。雷七〇七
 夏。綠葉三 綠樹八 【リ】
 冬。爐毛 【ロ】
 春。別れ霜四 若葉三 兎三 八 蕨四 若鮎四
 夏。病葉二〇八 【ワ】

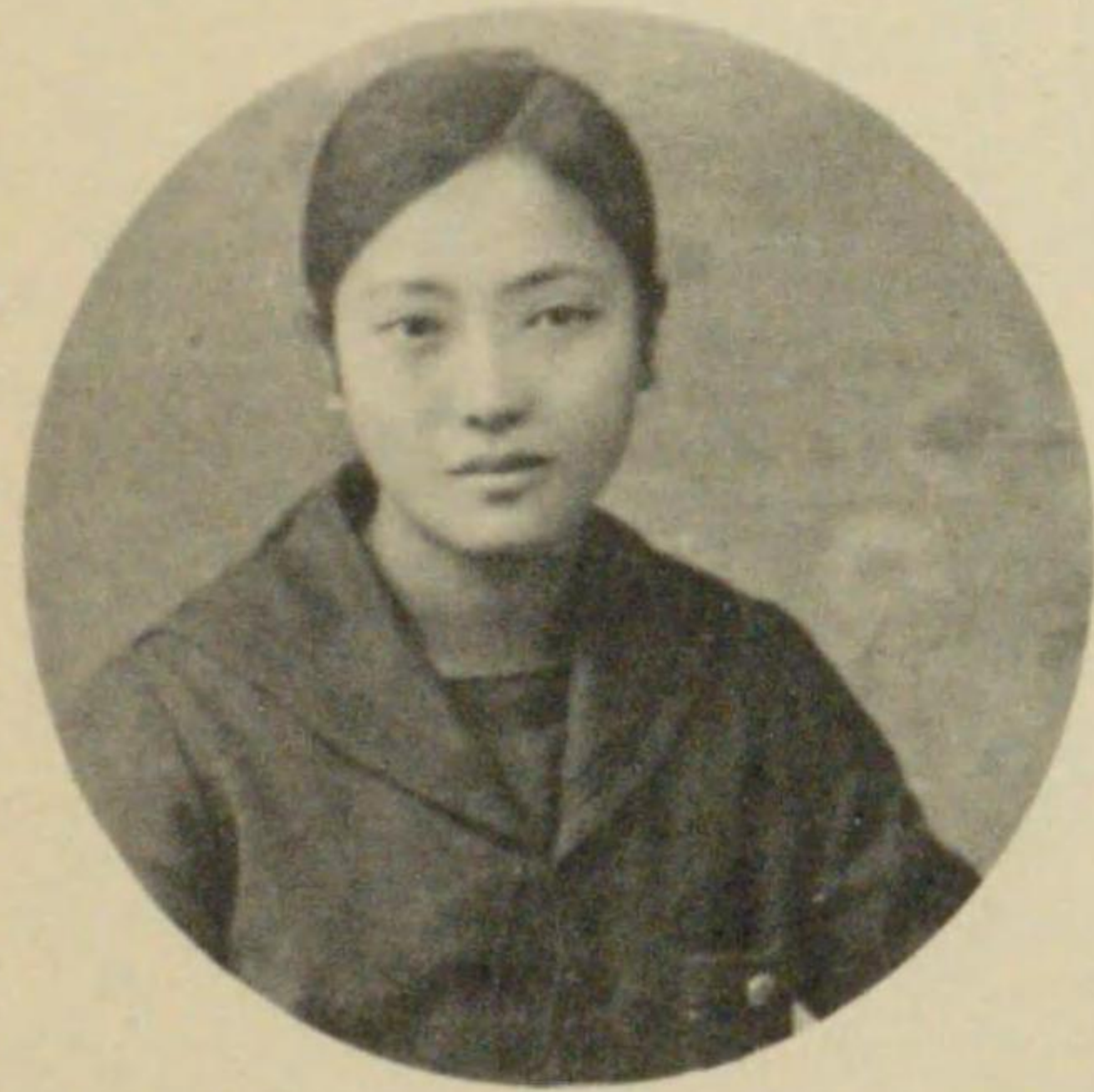


を道の活自
るあつつり迪

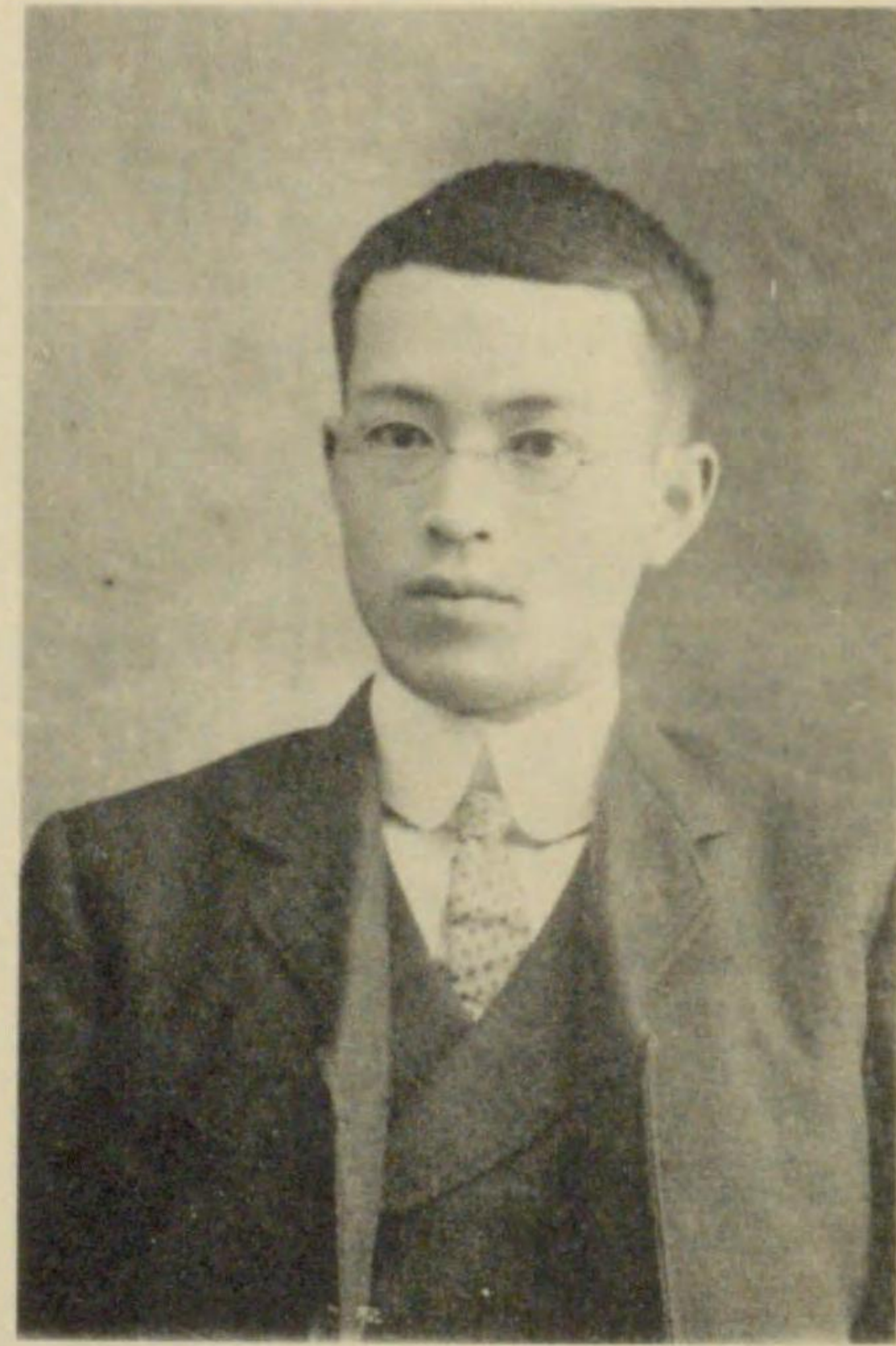


影近代千妻

代時湯新



の中學通
影近子愛女長



歳の婚結

春。 餘寒 罽 宵の春 齒 【ヨ】
 春。 落花 矣 【ラ】
 夏。 雷 ぞ せ 【リ】
 夏。 綠葉 三 綠樹 三 【ロ】
 冬。 爐 毛 【ワ】
 春。 別れ霜 罽 若葉 三 兎 空 合 蕨 罽 若鮎 罽
 夏。 病葉 二 〇 八

上梓に臨んで

□本年は五十歳を迎へました。人世五十とも言ひます、そこに肉體的變化を見ることも明らかでありませう。二十六歳の時に結婚をしたのでありますから、本年は丁度銀婚にも相當致します、精神的推移も争はれない事實でありませう。然るに變化を變化とし、推移を推移として、事實に即し得ない處に私の大きな惱みがあります。恚うした人間的苦惱をよそに、この度、亞浪先生の御溫情により「知命の賀、銀婚の賀はさて措いて、せめて俳句人として三十五年に垂んたる君が生命の記録たる「日石俳句鈔」だけでも世に問うてやりたいと思ふ」と先生御主唱のまことに「日石俳句鈔」の刊行を見ることになりました。嬉しいやら、悲しいやら、有り難いやら、怖いやら何とも言ひ知れぬ感情が、私の心の裡に錯綜して居ります。願れば、三十年の長いことつき、誹らるゝにつけ、笑はるゝにつけ、嬉しきにつけ、悲しきにつけ私を慰め、私を勵まして呉れたものは、眞に私の俳句であります。我が亞浪先生は嘗て「人間道即俳句道」と喝破されて居られます。人間日石の足跡は、それは直に俳人日石の足跡であります。人間日石のまこととは、それは即ち俳人日石のまことであります。息吹きも血汐もちからも、人間日石と俳人日石とに總て共通であることは言を俟たないのであります。私はこの長

い間、一起一倒、境遇の逆轉を見る度毎に「人間道即俳句道」をまざ／＼と、體驗させられて來たのであります。今やその人間日石、俳人日石としての「日石俳句鈔」が刊行され、自分の足跡、まごち、ちから、息吹き、血汐の滴りを一處に蒐めて點檢することが出来るのであります。拙劣な表現を見れば、時代の進展や、境遇の遷轉が思はれ。取材の不備や、手法の缺點は當時の精神的不安や、生活の苦惱に喘ぎつゝあつた、自分の姿を眼前に浮かべ得る、佳き作も、あじき作も一様に自分の過去の魂の動きであります。その懐きき自分の魂の動きを、こゝにはつきりと眺め得る、なんぞおほらかに快い極みでありませう。

□本鈔に收めたる作は三十年間數萬句のうちより最初約八百餘句を選び出しました。それを繰り返し／＼あきたらぬものは削り、回想同案に成るものは捨て、眞に私の心をうち得るもの六百二十四句を残して昭和二年一先づ編輯を打切つたのであります。今や上梓に臨んで、人間道にも俳句道にも、私の最も信頼し、畏敬する、或は恩師として、或は慈父として十有八年の長い間恩恵を蒙つた亞浪先生の御檢閲を頂き、五十餘句を抹消して、藝術的にも稍々完全に近きものとなりました。先生の御檢閲に際しての御言葉「初期のものは其見本さへ示せば足りる、苟も句集として發表する以上、その句々の價値は相當考量せねばならぬ。單なる自己の生活の記録ならば發表の意義がない、發表する以上は其處に當然鑑賞批判が起つてくる。よし緒言に斷つて置いたとしても、本來藝術品と銘を打つての俳

句集（打たなくともさう見るべきが本來である）である以上、其點は充分考へてかゝらねばならぬ。」又「何度讀み返しても、意味が汲みきれないといふ事は表現が不熟であるからだ、それでも自分にはわかると言ひ張るのは、獨り合點の自慰的態度だ、反省を要する。自分の心は自分が一番よく知つてゐても、自分のぼんの凹は自分には解らない、そのわからないぼんの凹を見て呉れた者のいふことは出来るだけ素直に聞く事を要する」云々。かたくななる私の平常の主張に對して恚うした御注意を頂く事は當然であり、御温情の程誠に感涙に堪へないのであります。爾來此御言葉を三思し反省の坐右銘として、一層精進をつゞけたいと思ひます。併しながら私としても「俳句は藝術品である」「鑑賞批判が起つて来る」「自分のぼん凹は見えない」云々事も、無學は無學なりに、變屈は變屈なりに充分考究もし、理解をも持つて居る積りではありますが、私はたゞ「俳句は人生生活の記録」「句の生命に及ばず批判は多くの場合無價値」「自分が一番よい自分の理解者である」云々ことを人一倍に強調するに過ぎないのであります。近來私の「批評無價値論」が「批評絶對不要論」と誤解さるゝに至つたことは、ひそかに微笑を禁じ得ないものがあります。この事に就ては先生初め一般の御了察を願つて置きます。

□一般句集の裝幀は畫家に依頼することが殆んど常例の感がありますが、人間道にも俳句道にも何等の関係もなく、又關係ありさしても單に知人であり、親友である云々云々だけで生命の記録たる俳句抄

の装幀を依頼することは何等の意味をもなさないを信じ、切に亞浪先生を頼はしたのであります。先生は御繁務中にもかかわらず、最も理解ある序文をくださいました。茲に心からなる感激の意を表し、併せて御健康を御祈りするものであります。終りに臨んで、日石會の發企並に事務に携はられた方々、及び御賛加を賜つた諸氏に對し、深甚の感謝を表して擱筆致します。

昭和六年七月十五日須磨の浦の幽かなる波音に浸りつゝ、

井 上 日 石

百 拜

昭和六年八月三十一日印刷
昭和六年九月八日發行

〔定價金壹圓五拾錢〕

版 權		所 有
--------	--	--------

著 者 井 上 莊 二
發行者 東京市外中野町西町四〇
臼 田 卯 一 郎
東京市外中野町西町四〇
發行所 石 楠 社
振替東京四七七七七番

印刷者 神戸市塚本通三丁目一四 上 山 善 太 郎
印刷所 神戸市塚本通三丁目一四 三 教 社 印 刷 所

純正俳句雜誌 石楠

石楠 白田亞浪著

井上石日著 第一輯 第二輯 第三輯 第四輯 第五輯

我等は、俳句を特有の民族詩として、形式に於ては廣義の十七音を肯定し、内容に於ては中心生命たる自然感を提唱し、其の純正なる制作を論議せしめ、俳壇の革新を期す。

俳句の尊きは、最高の詩品としての其の省察啓示にある。『石楠』が俳壇の最高權威たる所以は、則ち茲に存す。

俳句を求むる心

芭蕉を中心として

内容としての自然感

形式としての一章論

俳句小言落花生の花

俳句を作らんとするもの、俳人たるべき稀有の述作の必読の史を研究、俳人の芭蕉を中心として、其の創作の必読の名著なり。

俳句は如何なるものより成るか、其の内容を設ける獨創の新鮮なり。

俳句の形式に不拔の論定をくだしたる前人未發の新見。

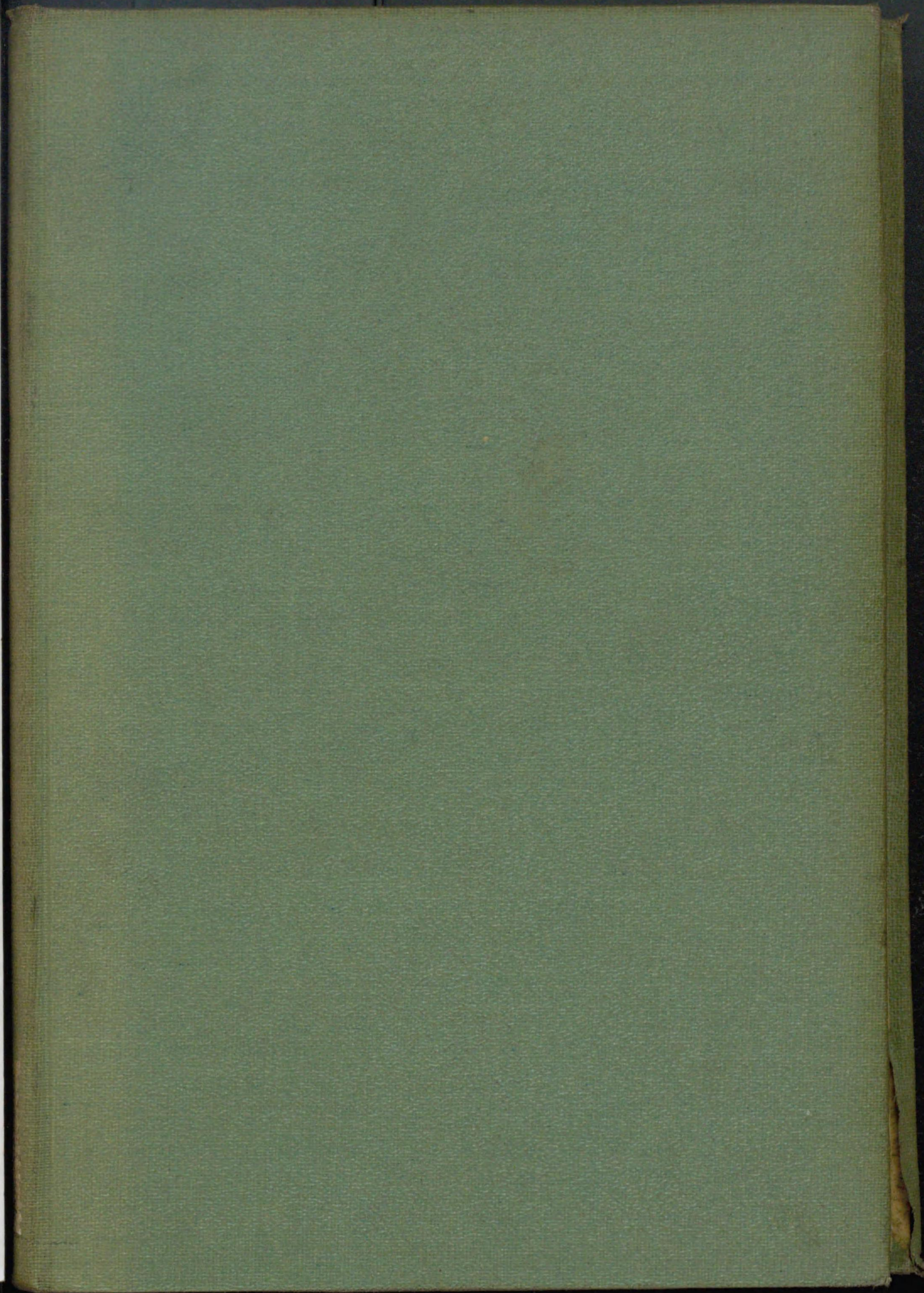
俳句に關する散文詞も言ふべきまこと異色ある文字なり。

三冊特價金 壹圓 參拾錢
 一月發行 一月一回

東京市外野町西四〇
 石楠社發行
 振替口座東京四七七七番

607
361



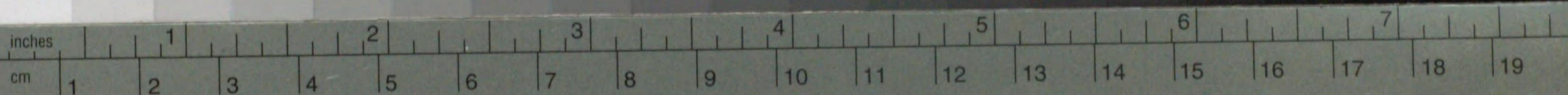


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

